

# キャンプ研究

第21巻

2018年2月発行

Japan  
Journal of  
Camping  
Study

Vol.21

Feb. 2018

National Camping Association of Japan

ターポリン・帆布の縫製・ウェルダ加工なら

 **未来テクノ株式会社**

～各種テント・防衛省装備品・海洋土木製品～

<http://www.mirai-techno.jp/>

東京本社 〒103-0005 東京都中央区日本橋久松町9-9 ユニゾ久松町清洲橋通りビル  
TEL: 03-3663-7886 FAX: 03-3663-7899  
水沢工場 〒023-0402 岩手県奥州市胆沢区小山字附野71-1  
胆沢工場 〒023-0402 岩手県奥州市胆沢区小山字中油池137

# キャンプ研究

第 21 卷 2018 年 2 月 15 日発行

## 目 次

### 研究論文

- キャンプ実習における大学生の資質能力の変容…………… 3  
ーふきだし法による自由記述の分析を通してー  
藤川 和俊・泉 敏郎
- 大学運動部に対する ASE プログラムが集団凝集性に及ぼす影響 …… 15  
ー新入生と在学生の比較からー  
徳田 真彦・伊原久美子・加藤 佑一・高橋 宏斗・久田 竜平・田淵 洋勝・飯田 輝

### 講演録

- 第 21 回日本キャンプミーティング講演会…………… 33  
自然と手を入れた自然（園芸）の中で ～人を育てる野菜作り～  
藤田 智

### 特別寄稿

- 我が国における野外救急法の現状と課題…………… 43  
寺田 達也・柏 澄子・佐藤 初雄・溝手 康文・稲垣 泰斗・岡村 泰斗・河波 弘晃・  
稲垣 尊仁・島崎 晋亮・小清水哲郎・山本 康之

### 資 料

- 「キャンプ研究」投稿規程…………… 53  
「キャンプ研究」収録題目一覧…………… 56  
CAMP MEETING IN JAPAN 発表題目一覧 …… 60

編集後記



# 研究論文



## 研究論文

キャンプ実習における大学生の資質能力の変容  
 —ふきだし法による自由記述の分析を通して—

Transformation of the competencies of university students through the camping  
 - Analysis of free responses through the balloon method -

藤川和俊（帝京平成大学） 泉敏郎（帝京平成大学）

FUJIKAWA Kazutoshi · IZUMI Toshirou

In the modern society, aging, globalization, and computerization will have further progressed. Each person must have competencies to collaborate and then solve various problems that occur not only in Japan but also at a global level. To respond to that necessity, the university education came to attach great importance to improve competencies named “Gakushi ryoku”. The purpose of this study is to consider how the competencies of university students transform through the camping and what kind of factor the ability of the university student transformed by. Subject of this study was 21 university students who participated in the camping of four days and three nights conducted in September, 2017. Through a qualitative research using analysis of free responses acquired through the balloon method, the following results were extracted.

- 1) Opportunity when students showed Metacognitive skill increased day by day by interaction with others and unusual experiences. Therefore, it is considered that Metacognitive skill of students was improved through camping.
- 2) Skill to collaborate and mind to respect for others and empathize with were improved by the following three interaction among students. First, interchange to cultivate friendship with others. Second, cooperation that shared roles. Third, collaboration for problem-solving.
- 3) Attachment and respect for nature were cultivated by the learning through the rich contact with nature.

Keywords:

camping, university students, competencies, qualitative research

はじめに

現代社会は、高齢化、グローバル化、情報化が進展しており、地球規模で生じている様々な課題を他者と協働して解決していく資質能力が求められるようになってきている。例えば、OECDのDeSeCoプロジェクトは、人生の成功や社会の発

展に必要な資質能力として「相互作用的に道具を用いる」「異質な集団で交流する」「自律的に活動する」<sup>1)</sup>という三つを示している。また、カリキュラム・リデザイン・センター（the Center for Curriculum Redesign）では、教育を「知識」、「スキル」、「人間性」、「メタ学習」<sup>2)</sup>の四つの次元か

ら検討し、現代社会における知識、スキル、人間性、メタ認知<sup>3)</sup>の重要性を指摘している。国内においても、経済産業省によって「社会人基礎力」が示され、「前に踏み出す力（アクション）」、「考え抜く力（シンキング）」、「チームで働く力（チームワーク）」<sup>4)</sup>が必要な資質能力としてあげられている。

こうしたなか、大学教育においても、2008年に文部科学省によって「学士力」<sup>5)</sup>の育成が提唱された（表1）。つまり、これからの大学教育では、知識の伝達のみならず、「汎用的技能」や「態度・志向性」、「総合的な学習経験と創造的思考力」といった様々な資質能力の育成が求められているのである。このような課題に取り組むためには、大学で実施される各科目が、学生のどのような資質能力の育成に寄与し得るのか、そしていかにして育成が可能になるのかを明らかにする必要がある。以上の問題意識から、本研究では、大学で集中授業として実施されたキャンプ実習を対象とし、授業を通じて学生のどのような資質能力が、いかなる要因により変容するのかを検討、考察する。

大学生を対象としたキャンプ実習の有効性に関する先行研究には、まず、「社会的スキル」を測定するものとして開発された「Kiss-18 尺度」<sup>6)</sup>を用いたものが存在する。例えば吉田<sup>7)</sup>は、短期大学生を対象とした一泊二日のキャンプ実習が「社会的スキル」の初歩的なスキルを有意に向上させたことを示している。また、市河ら<sup>8)</sup>は、保育専攻学生を対象とした三泊四日のキャンプ体験がコミュニケーション能力、問題解決能力の向

上に寄与することを指摘している。

その他の尺度を用いた研究としては、高山<sup>9)</sup>が、「小中学生自然体験効果測定尺度」<sup>10)</sup>を大学生用に修正した質問紙調査及び自由記述を分析し、文科系大学の学生を対象とした組織キャンプが他者関係やコミュニケーション能力の向上に効果を及ぼしたことを指摘している。また、平野ら<sup>11)</sup>は、質問紙調査により、組織キャンプを通じて大学生の自己効力感が向上したことを指摘している。

先行研究のこれらの指摘は、キャンプ実習が大学生のコミュニケーション能力や問題解決力、自己効力感を育成するうえで有効であることを示している。しかしながら、キャンプ実習がもつ資質能力の育成可能性やそれを可能にする要因を考察するためには、さらに検討すべき課題も残されている。第一に、先行研究では、特定の資質能力に注目し、その変容を検討してきた。これらの能力は、あくまでこれからの社会に必要な資質能力の一部であり、学生の変容をより広い視点から分析することが必要である。第二に、先行研究は、主として質問紙調査における実習前後の得点の変化から、学生の変容を明らかにしてきた。一方、学生の記述やインタビュー、行動記録等の質的なデータにより、学生がキャンプ実習を通じて具体的にどのようなことを感じたり学んだりしていたのかを詳細に分析した研究は十分な蓄積をみない。

以上のことから、本研究ではふきだし法による学生の自由記述を手がかりとした質的研究により、キャンプ実習における学生の経験を解釈し、どのような資質能力がいかに変容していったのかを考察する。ふきだし法は、亀岡<sup>12)</sup>が開発し、

表1 学士力の概要

学士力に関する主な内容
1. 知識・理解 専攻する特定の学問分野における基本的な知識を体系的に理解（多文化の異文化に関する知識の理解、人類の文化・社会と自然に関する知識の理解）
2. 汎用的技能 知的活動でも職業生活や社会生活でも必要な技能（コミュニケーション・スキル、数量的スキル、情報リテラシー、論理的思考力、問題解決力）
3. 態度・志向性 自己管理能力、チームワーク・リーダーシップ、倫理観、市民としての社会的責任、生涯学習力
4. 統合的な学習経験と創造的思考力 自らが立てた新たな課題を解決する能力



松本<sup>13)</sup>が体育学習に応用した方法であり、1枚の調査用紙<sup>14)</sup>に複数のふきだしを用意したものを使用する。この方法は、オープンエンドの質問調査紙よりも回答が容易でありながら、内容を文脈と切り離さずに捉えられる点、複数の視点からの記述が得られる点に特徴がある。したがって、学生の学びや経験を幅広い視点かつ、文脈を含めて解釈することが可能と考えられる。

## 1. 方法

### (1) 対象

2017年9月3日～6日に実施されたT大学キャンプ実習へ参加した学生21名（男性15名、女性6名）を対象とし、調査を実施した。

### (2) キャンプの概要（表2）

本キャンプ実習は、新潟県中魚沼郡津南町のニューグリーンピアキャンプ場で3泊4日の日程で実施され、目的として1) 野外での生活体験を通

して社会で必要な協調性、責任感、規律を身につける、2) キャンプにおける必要な知識、技術を習得する、3) 自然への理解と愛着を高める、4) キャンプインストラクターの資格取得の4点を挙げている。また、宿泊はキャンプ場の常設ログハウスとテント泊とし、食事も自炊を導入した。

キャンプの運営、指導に関しては、当該大学の専任教員がチームビルディング、野外炊飯、テント設営撤収を対応した。また各種のアクティビティにおいてはキャンプ場所属の指導者がイニシアティブ、ネイチャーゲーム、ノルディックウォーキング、ロープワーク、ナイトプログラムを担当した。組織キャンプにおいてはキャンプカウンセラーを配置せず、すべてのプログラムにおいて班長（チームリーダー2名）にその役割を任せることとした。また、班長（チームリーダー）以外の班員全員に何らかの役割を担わせた。

キャンププログラムは、初日に参加者の交流を図ることを目的としてチームビルディングを実施

表2 キャンプ実習プログラムの概要

9月3日	9月4日	9月5日	9月6日
	起床 点呼・朝の集い	起床 点呼・朝の集い	起床 朝の集い
	朝食	野外生活技術④（朝食）	コテージ清掃・荷物移動・朝食
	野外生活技術②	野外生活技術⑤ テント撤収1	アクティビティ⑨
	テント設営・荷物移動	アクティビティ⑥<雨天決行>	野外ゲーム
	アクティビティ③<雨天決行>	森林セラピー	キャンプ学科講習会④
	A班：イニシアティブゲーム		復習
	ネイチャーゲーム		キャンプインストラクター認定試験
	B班：ノルディックウォーキング	キャンプ場到着 昼食	昼食
	昼食	野外生活技術⑥ テント撤収2	閉講式
	アクティビティ④<雨天決行>	キャンプ学科講習会②	出発
キャンプ場到着	A班：ノルディックウォーキング		
開講式・オリエンテーション	B班：イニシアティブゲーム	アクティビティ⑦	
アクティビティ①	ネイチャーゲーム	ネイチャークラフト	
チームビルディング	休憩	キャンプ学科講習会③	
野外生活技術①（夕食）	野外生活技術③ロープワーク講習会	グループミーティング	
カレー作り・飯盒炊飯	キャンプ学科講習会①	夕食	
夕食・片づけ	夕食	夕食	
アクティビティ②	入浴	アクティビティ⑧	
（ナイトウォッチング）	グループミーティング	キャンプファイヤー	
入浴	点呼・就寝	入浴	
グループミーティング	アクティビティ⑤<雨天決行>	グループミーティング	
点呼・就寝	テント泊	点呼・就寝	
宿泊：野外常設簡易施設	宿泊：テント	宿泊：野外常設簡易施設	

し、その後野外炊飯に取り組んだ。2日目はテント設営後、班員の機能性を高めるプログラムとして、班で冒険的な要素を多く含む課題を解決していくイニシアティブゲーム、ネイチャーゲームを実施した。その後、自然観察活動としてノルディックウォーキングを行った。3日目は、テント撤収作業後、森林セラピーを体験し、メインプログラムとしてスタンプを含めたキャンプファイヤーを行った。また、班別ミーティングを毎夜開催し、1日の振り返りを行った。

### (3) 研究方法

本研究では、学生の学びや経験を幅広い視点かつ、文脈を含めて解釈するため、ふきだし法による自由記述を研究方法として用いた。質問項目はキャンプ実習で感じたことを自由に記述できるように「今日の活動を振り返って感じたことを自由に記述してください」としたが、回答しやすいように、「自分のこと、他者のこと、驚いたことや印象に残った出来事など」と記述の観点を記した(図1)。

データ収集はキャンプ実習を受講した全学生を対象に計3回行い、毎夜のミーティング後から朝の集いまでの間に記入してもらった。なお、参加した学生には、調査は無記名であり、個人が特定されることはないこと、成績には一切関係しないこと、回答は強制ではなく自由意志であることを

口頭及び文書で説明し、同意を得た後に実施した。

### (4) 分析方法

ふきだし法で得られたデータについては、KJ法<sup>15)</sup>による分類・カテゴリー化を行った。作業は大学において体育科教育を担当する研究者2名で行い、作業結果について教育学を担当する大学教員を含めた3名で検討し、修正を行った。具体的な手続きについては以下の通りである。

#### ① ラベルづくり

ふきだし法による自由記述から得られたデータについて、一つの内容を含む文を1項目として、1枚のカードに記入する作業を行った。一つのふきだしに複数の内容が含まれる記述については、内容を分割し、それぞれを1枚のカードに記入した。

#### ② 小グループ編成

類似したカードを採取し、小グループに分類した。似たものがない場合、無理にグループ化せず、単独で1グループとして扱うこととした。

#### ③ 表札づくり

分類したそれぞれの小グループに対し、その内容を端的に表す言葉をつけた。

#### ④ 中・大グループ編成

小グループの内容を踏まえたうえで、中グループ、大グループと徐々に大きなグループになるようにカードを採取、分類した。

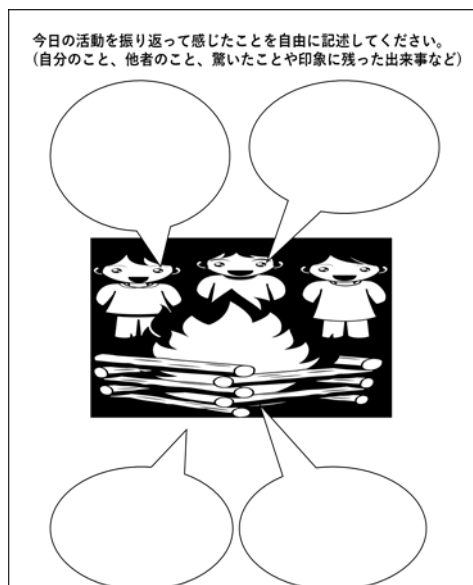


図1 ふきだし法調査用紙

## 2. 結果

キャンプ実習を通して、ふきだし法による記述は全296件(1日目111件、2日目99件、3日目86件)みられた。得られた記述を分類した結果、中グループとして「情意」、「状態」、「理解」、「メタ認知力」、「協力」、「協働」、「他者」、「交流」、「集団の規律」、「自然・生物の尊重」、「自然・生物との触れ合い」、「自然に対する理解」、「自然に対する敬意」が形成された。その後、これら中グループの内容を踏まえ、「自己」「他者・交流」「自然・生物」の3つの大グループに整理された。以下、日別に詳細を示す。

## (1) 1日目(表3)

## ①「自己」

自己に関する記述では、「情意」、「状態」、「理解」、「メタ認知力」という4つの中グループが形成された。1つ目の「情意」は18件と最も多く、小グループをみると、「飯盒の時はほんもカレーもうまくいきよかった」(成功の喜び)や「指あそびやゲームをととても楽しくすることができた」(楽しさ)、「明日からより実践的に行うのでしっかり学びたい」(意欲)のように肯定的なものが目立つ。一方、「最後のナイトウォッチングはととても暗く怖かった」(恐怖)のように必ずしも肯定的とはいえない感情も抱いていた。

2つ目の「状態」は3件あり、「チームビルディングが想像以上に疲れました」(疲労)、「アクティビティでアイスブレイクが出来た気がしました」(リラックス)の2グループが形成された。

3つ目の「理解」については、「飯盒でご飯を炊くことを学べた」のように、主に夕食づくりの方法に関する記述がみられた。

4つ目の「メタ認知力」は7件あり、「夕食のカレー作りの中で思ったのは、自分はあまりにも料理をしたことがないと実感した」(モニタリング)のように自己の認識や行動を振り返る内容と「班の人で切るのがうまい人がいたのでその人の切り方を家で練習しようと思う」(コントロール)のように、行動をより良い方向へコントロールする内容の2グループに分類さ

れた。

## ②「他者・交流」

「他者・交流」は初日の記述で最も多かったグループであり、「協力」、「他者」、「交流」、「集団の規律」の4つの中グループが形成された。

「協力」のグループは、「他者・交流」の中でも最も多く、19件確認された。具体的には「カレーライスの役割分担が思ったよりも早く出来しかり一人一人仕事が出来ました」のように、「分担」に関する記述が多く、チーム内でうまく役割を分担しながら活動できていたことがわかる。また、「みんなで協力しながらできたので楽しかった」(協力の楽しさ)、「チーム全員で協力することで工程をひとつずつスムーズに終わらせることができてよかった」(価値)のように、協力することを楽しさを感じたり協力の価値を認めたりする記述もみられた。さらに「明日以降は今日以上に仲間のために役に立ちたいと思った」(責任感)のように、チームの一員としての責任感を持ち、貢献しようとする意欲も確認された。

「他者」に関する記述では「野菜の切り方も人それぞれ個性がでていておもしろかったです」(他者理解)のように、他者の個性や性格を肯定的にうけとる記述がみられた。しかし、「もう少し人との距離感を理解してほしいなと思いました」(不満)、「人数が多いとやっぱり性格もだいぶ異なってくるので、最初は顔をうかがったりして難しい」(とまどい)のように、

表3 キャンプ実習における大学生の経験(1日目)

大グループ	中グループ	小グループ
自己(31)	情意(18)	成功の喜び(11)楽しさ(4)悔しさ(1)恐怖(1)意欲(1)
	状態(3)	疲労(2)、リラックス(1)
	理解(3)	理解(3)
	メタ認知力(7)	モニタリング(4)コントロール(3)
他者・交流(51)	協力(19)	分担(8)楽しさ(5)価値(4)責任感(2)
	他者(13)	他者理解(5)感謝(3)不満(2)とまどい(2)
	交流(17)	親睦(9)不安の解消(5)コミュニケーションの価値(2)寂しさ(1)
	集団の規律(2)	時間(2)
自然・生物(29)	尊重(1)	命の尊重(1)
	触れ合い(15)	楽しさ・嬉しさ(8)快さ(2)残念(2)生き物への苦手意識(2)感動(1)
	自然に対する理解(12)	自然に対する理解(12)

異質な他者に対する不満やとまどいを感じていたことも明らかになった。その他、「みんなが先輩なだけにとてもかわいがって優しくしてくれてとてもやりやすいものでした」（感謝）のように他者に感謝する記述も確認された。

「交流」のグループでは「アクティビティは、初めての人と色んな関わりを持ってとても楽しかった」（親睦）、「不安しかなかったが、到着してすぐにグループで交流する機会があったので、スムーズに話しかけることが出来ました」（不安の解消）のように交流によって親睦を深めたり不安が解消されたりしていった様子が記述されていた。また、「21人22脚の時は特に全員の息や声かけの大切さを改めて感じた」のように「コミュニケーションの重要性」を実感していた学生も確認された。しかし、「一年生が全然なくて寂しいです」（寂しさ）のように、他者との交流に際し寂しさを感じていた学生もいた。

最後に、「集団の規律」に関して、「集合時間前に全員がしっかりと集合出来ていて団体行動が出来ているなと思った」（時間）との記述がみられ、時間を守って行動できていたことがわかる。

### ③「自然・生物」

「自然・生物」については「尊重」、「触れ合い」、「自然に対する理解」の3グループが形成された。まず、「尊重」は1件のみであったが、「命を大切にしようと思った」のように生命を尊重する態度が確認された。

次に、「触れ合い」のグループでは「ホテルの光をしっかりと生で見ることが出来たのはうれしかった」（嬉しさ）、「森林の中や小川の場所に行くと、普段と空気が変わって涼しく気持ち良くなる」（快さ）のように、触れ合いによる楽しさや感動、快さがみられた。一方、「虫はやはり苦手です」のように「生き物への苦手意識」もみられた。

最後に「自然に対する理解」のグループでは「ナメクジがいることで自然環境が保たれていることが分かった」のように、活動を通し自然に関する知識を理解していたことが確認された。

### (2) 2日目（表4）

#### ①「自己」

「自己」に関する記述は、1日目と同様、「情意」、「状態」、「理解」、「メタ認知力」の4グループが形成された。

「情意」に関しては、「色んなゲームをして楽しかった」といった「楽しさ」が多く確認されたが、「キャンプファイヤーではもっといい出し物をする」という「向上心」も1件みられた。

「状態」については2件のみであるが、「すごく疲れました」、「とても眠かったです」のように、学生が「疲労」や「眠気」を感じていたことがわかる。

「理解」では、「ノルディックウォークは高齢者の方などが健康増進のためにするものだと聞いた」、「3点で支えると楽だというのが分かった」のように、ノルディックウォークについて体験を通して理解していたことがわかる。

「メタ認知力」については、初日から大きく

表4 キャンプ実習における大学生の経験（2日目）

大グループ	中グループ	小グループ
自己(45)	情意(12)	楽しさ(11)向上心(1)
	状態(2)	疲労(1)、眠気(1)
	理解(8)	理解(8)
	メタ認知力(23)	モニタリング(14)コントロール(9)
他者・交流(34)	協働(18)	協働の達成感(6)団結(6)協働の必要性(3) 協働の楽しさ(2)個性の発揮(1)
	他者(10)	感謝(4)理解(2)共感(2)敬意(2)
	交流(6)	親睦(6)
自然・生物(20)	尊重(1)	自然の尊重(1)
	触れ合い(17)	感動(9)楽しさ(6)快さ(2)
	自然に対する理解(2)	自然に対する理解(2)

増加し、23件の記述がみられた。内容をみると、「大自然をウォーキングして、いつも普通に歩いている姿勢は思ったよりも良くなかった」(モニタリング)のように、ウォーキングを通して普段の歩き方や姿勢を振り返る記述が複数みられた。また、「調子に乗って転んでしまった。自然の中では常に危険があるので注意深く行動したい」(コントロール)のように、モニタリングを踏まえ、自己の行動をコントロールしようとする記述も増加していた。

## ②「他者・交流」

「他者・交流」については1日目と異なり「協働」「他者」「交流」の3グループが形成された。

「協働」は1日目にはないグループである。一つの課題をグループで意見を出し合いながら解決していく協働的課題解決に関わる記述が多く存在していたため、役割分担が目立った初日の「協力」と区別した。具体的な記述としては「イニシアティブゲームは、チームのみんなで知恵を出し合いながらクリアしていくことができ、とても達成感がありました」(協働の達成感)、「特にみんなと意見を言い合っているとき、とても結束力がみえたと思う」(団結)、「グループ内で一緒に考えて動くのが楽しかった」(協働の楽しさ)のように、協働を通して肯定的な感情を抱いていたことがわかる。また、「意見をたくさん出せて自分らしさが出せた」(個性の発揮)のように、グループで協働する中で個性を発揮できたと振り返る記述や「イニシアティブゲームをすることで仲間と協力する必要性がわかりました」(協働の必要性)のように必要性を実感する記述もみられた。

「他者」のグループでは、感謝やとまどいなどが混在していた1日目と異なり、「私にはないメンバーの考えを聞くことができよかった」(敬意)、「先輩たちが協力してくれたおかげで無事、ケガをせずに生還できた」(感謝)、「達成したときに皆の笑顔はステキでした」(共感)「BBQは女子もたくさん食べることがわかりました」(理解)など、すべて肯定的な記述であ

った。

「交流」についても、不安や寂しさがみられた1日目と異なり、すべて「親睦」のグループにまとめられた。内容をみても「昨日より会話が増えてきて、より充実した日になった」のように、1日目以上に親睦を深められたことがわかる。

## ③「自然・生物」

「自然・生物」については1日目と同様の3グループが形成された。まず、「尊重」は1件であるが、「自然の中を歩いたことで森林を大事にしたいと思った」(自然の尊重)のように、活動を通して自然を尊重する態度が芽生えていったことがわかる。

「触れ合い」は17件と最も多く、「景色がとってもきれいで眺めは最高でした」(感動)、「色々な植物を見たり実際に手に取ったりするのは初めてだったので楽しかった」(楽しさ)、「空気がきれいで天気がよくいい汗がかけました」(快さ)のように、学生が自然と触れ合う経験を肯定的に捉えていたことがわかる。

「自然に対する理解」では、「同じような葉でも微妙に違うなど、植物をじっくりみて学ぶことができた」のように、様々な植物の違いに気づくことができた様子が記されており、自然と触れ合う体験を通して理解を深めていったことがわかる。

## (3) 3日目(表5)

## ①「自己」

3日目も、これまでと同様の4グループが形成された。まず、「情意」に関する記述は4件と、これまでに比べて減少したが、「明日が最終日とは、寂しいです」(寂しさ)など、これまでとは異なる情意が確認された。

「状態」についてはこれまでより若干増加し、「昨日の疲れが残っていたのか下半身がすごく痛んでいました」のように、蓄積した疲労を訴える記述がみられた。

「理解」のグループでは、主にキャンプファイヤーについて「各々の役割を知れて勉強になりました」、「準備、順序、方法がたくさんある」のように記されており、体験を通してキャンプファイヤーに関する知識を理解していたことがわかる。

「メタ認知力」のグループは2日目よりさらに増加し、24件みられた。具体的には「自然の物を使って、自分の好きなように作るという自由な発想が自分にはないのに気づきました」(モニタリング)、「二日目にネイチャーゲームをやっていたため葉一つ一つでも少し違いを見つめるように意識してみることができた」(コントロール)のように、活動を通して自身の能力を客観的に把握したり、過去の活動や学んだことを振り返りつつ行動をコントロールしたりする記述が多くみられた。

## ②「他者・交流」

「他者・交流」も2日目と同様「協働」、「他者」、「交流」に分類された。

「協働」では、「スタンプでは班のみんなで意見を出し合いながら良い作品をつくることができました」(協働の達成感)、「話し合い、案を出し合う中でカレーの時よりもより仲良くなって面白いスタンプができた」(団結)のように、協働的に課題に取り組むことによる達成感や仲の深まりを感じていたことがわかる。

「他者」のグループでは、「皆の作品とか、すごい発想力でびっくりしました」(敬意)のように、他者の考えや発想に敬意を示す記述が5件みられた。また、「先輩方がいくつか質問してくれたおかげで少し話すことと緊張をほぐすことができました」(感謝)、「みんなが楽しめるようにと、出演する皆が楽しめるものを作った」(尊重)、「常にみんなの顔が笑顔でした」(共感)のような記述もみられ、他者に対するまなざしが肯定的なものであったことがわかる。

「交流」については「新しい友達ができ、わいわいできて、すてきな思い出になりました」(親睦)のように、三日間を通して親睦を深めていたことが確認された。

## ③「自然・生物」

「自然・生物」については、「敬意」、「触れ合い」の2グループが形成された。まず、「敬意」のグループでは、「森の木々は雨を受け止めて地面に水をたくわえたり水を循環させたり、生活

表5 キャンプ実習における大学生の経験(3日目)

大グループ	中グループ	小グループ
自己(39)	情意(4)	達成感(1)感動(1)楽しさ(1)寂しさ(1)
	状態(5)	疲労(5)
	理解(6)	理解(6)
	メタ認知力(24)	モニタリング(16)コントロール(8)
他者・交流(25)	協働(11)	協働の達成感(5)団結(6)
	他者(10)	敬意(5)感謝(2)尊重(1)共感(1)
	交流(6)	親睦(6)
自然・生物(22)	敬意(4)	尊敬(3)感謝(1)
	触れ合い(17)	感動(6)快さ(7)興味(4)

していくためにいろいろなことをして、自然はすごいなと思いました」(尊敬)、「自然から命をもらって生活できていると学び、感謝しなければいけないと思いました」(感謝)のように、植物や生物の働きの大きさに尊敬の念を抱いたりそれに対し感謝したりする記述が確認された。

「触れ合い」のグループでは、「ブナの木の上に感動した」(感動)、「山の中に入った時の空気が明らかに違っておいしいと感じた」(快さ)のように、これまでと同様自然に対し感動したり環境を快く感じたりする記述がみられた。加えて「木によって聞こえる音の違いがありとても面白かった」(興味)のように、興味が喚起されている様子も確認された。

### 3. 考察

これまで、3回の調査結果を個別に整理してきた。以下では個別の結果に加え、キャンプ実習の経過とともに記述内容がどのように変化していったのかということにも注目しながら、学生のどのような資質能力が、どのような要因により変容していったのかということについて考察を加える。

#### (1) メタ認知力の向上

まず、「自己」に関する記述に注目すると、「メタ認知力」の記述が7件(1日目)、23件(2日目)、24件(3日目)とキャンプ実習を通して大きく増加したことがわかる。これは、より多くの学生が、あるいは一人の学生がより多くの場面で自己の能力や行動についてモニタリングし、コントロールするようになっていったことを意味する。メタ認知力を育成するためには、まず自己について振り返る機会を増やすことが必要であるため、記述数の増加から、本キャンプ実習はメタ認知力の育成に寄与していたと解釈できる。

では、どのような要因によってメタ認知力の発揮が促されたのか。自由記述の内容から以下の2点が考えられる。まず、第一に、非日常の体験である。学生がメタ認知力を発揮した場面として多かったのが、カレー作りやノルディックウォーキング、植物を用いた制作活動など、普段体験することのない活動においてであった。そうした非日

常の体験が自己の認識や能力、行動を客観的にモニタリングする契機となったと考えられる。第二に、異質な他者の存在である。カレー作りや作品制作において、他者の動きや作品をみながら、自分がうまく動けていないことや、自由な発想がなかったことを振り返ったり、上手にできている人の行い方を真似しようとしたりしていた。以上のことから、自分とは異なる他者の行動や発想に触れることにより、自己を客観的に振り返ることが可能になったと考えられる。

#### (2) 他者との関わり方の変化

次に「他者・交流」に関する記述に注目すると、第一に他者との関わり方が1日目から2日目、3日目と次第に変化していったことがわかる。具体的には、親睦を深めるための「交流」や、役割分担を中心とした「協力」という関わり方から、一つの課題をグループで意見交換しながら解決していく「協働」へと変化していった。また、こうした関わりによって、学生には、課題解決に向け団結したり個性を発揮したりする力や、協働の価値を認め責任を果たそうとする態度が芽生えていったことがわかる。

こうした協働する力の育成を可能にした要因は、まず、キャンプ実習のプログラムにあると考えられる。本実習では、1日目前半には親睦を図るチームビルディングを実施し、その後、役割分担が必要なカレー作りやテント設置、協働が求められるイニシアティブゲームやネイチャーゲーム、スタンプへと展開していった。このように徐々に関わり方を変化させていったことが、学生の協働する力の育成に寄与したと思われる。また、後述するが、他者の異質性を不安、不満なものではなく重要なものと捉え、他者に敬意や共感を抱くようになったことも、多様な関わり合いを促したと思われる。

#### (3) 異質な他者に対するまなざしの変化

先述のように、「他者・交流」についてもう一つ注目すべき変化として、異質な他者に対するまなざしの変化があげられる。1日目の記述は、感謝や理解、不満、とまどいが混在しており、必ずしも肯定的なものではなかった。しかし、2日目

以降では、不満やとまどいの消失とともに、敬意や尊重、共感が生まれている。また、「他者・交流」に関する記述数は51件（1日目）、34件（2日目）、25件（3日目）と減少しているが、こうした記述数の変化は、他者との関わりが減少したのではなく、むしろ敬意・尊重・共感といった態度が育まれたことのあらわれではないかと思われる。つまり、他者との出会いや不満、とまどいが新鮮さや違和感として意識されやすいのに対し、尊重や共感は印象的な経験としては意識されにくい。そのため、他者に対する敬意・尊重・共感が育まるとともに、記述数が減少していったのではないかと推測される。以上のことから、キャンプを通して他者に対する敬意・尊重・共感という態度が育まれたと解釈できる。

こうした変化をもたらした要因として、一つの課題に向けて他者と協働した経験が考えられる。1日目の記述では、自分とは異なる他者の性格や行動を理解しながらも、そこに敬意や共感を示す記述はみられなかった。しかし、協働的な活動が取り入れられた2日目には、話し合う中で自分とは異なる他者の考えを重要なものとして受け止めたり、達成した喜びを共感したりするようになっていた。このように、他者と共通の課題に取り組む中で、他者の異質性が不満なものから重要なものへと変化し、そのことが他者に対する敬意・尊重・共感という態度の育成につながったと考えられる。つまり、先述した協働する力と、他者に対する敬意・尊重・共感という態度は、互いに影響を与えながら育まれていったと考えられる。

#### (4) 自然に対する理解とまなざしの変化

最後に、「自然・生物」の記述にみられる変化として、自然に対する愛着や敬意の高まりがあげられる。1日目の記述では「命の尊重」が1件みられたのみであるが、3日目には、自然の働きに対する尊敬や感謝の思いが4件記されていた。また、「触れ合い」に関する記述においても、非日常の出会いに対する「楽しさ・嬉しさ」から、自然がもつ特徴、美しさに対する「感動」、「興味」へと次第に愛着が高まっていった様子を見ることができている。

こうした変化は、様々な体験を伴いながら自然

について理解したためであると思われる。学生は、「触れ合い」に関して15件（1日目）、17件（2日目）、17件（3日目）と数多く記述しており、内容をみても、1日目以外はすべて肯定的な記述になっている。自然の働きについて、単に知識としてではなく、肯定的な体験とともに理解したからこそ、自然に対する愛着や敬意の態度が高まったと考えられる。

#### おわりに

本研究は、キャンプ実習を通して大学生のどのような資質能力が、いかなる要因によって変容したのかについて考察してきた。以下、本研究で得られた知見と今後の課題を述べる。

第一に、非日常の体験や他者との関わりによりメタ認知力を発揮する機会が増加し、そのことがメタ認知力の育成に寄与したと考えられる。この能力はこれからの社会に必要なものであるが、これまでのキャンプ研究ではあまり指摘されてこなかった能力といえる。

第二に、他者との親睦を図る交流、役割分担による協力、課題解決に向けた協働という多様な関わりにより、他者と協働する力や他者に対する敬意・尊重・共感が育まれたと解釈された。これらの資質能力は互いに影響しながら育成されていったと考えられる。

第三に、自然の知識について触れ合いを通して学ぶことで、自然に対する愛着や敬意が育まれていったと考えられる。

以上のように、本研究では、大学のキャンプ実習による資質能力の育成可能性とそれを可能にする要因について、メタ認知力という新たな側面を含めて示すことができた。今後は、インタビュー調査や活動中の発話分析等に加え、個人の変容を詳細に分析していくことを課題とする。

#### 引用文献及び注

- 1) ライチェン, D.S.・サルガニク L.H. (立田慶裕監訳) (2006) 『キー・コンピテンシー—国際標準の学力をめざして—』 明石書店。
- 2) C. ファデル・M. ビアリック・B. トリリング (岸学監訳) (2016) 『21世紀の学習者と教育の4つの次元—知識、スキル、人間性、そしてメタ学習—』 北大路書房、6ページ。



- 3) メタ認知とは、「現在の自分の状態やこの先の目標、可能な行為や方略、そして結果について内省すること」（前掲『21世紀の学習者と教育の4つの次元－知識、スキル、人間性、そしてメタ学習－』、134ページ）とされている。本研究では、この定義に基づき、自分の状態や思考、行為について内省し、コントロールする力を「メタ認知力」と呼ぶこととする。
- 4) 経済産業省（2006）「社会人基礎力に関する研究会－中間取りまとめ－」。
- 5) 文部科学省中央教育審議会（2008）「学士課程教育の構築に向けて（答申）」。
- 6) 堀洋道・山本真理子（2001）『心理測定尺度集Ⅱ－人間と社会のつながりを捉える＜対人関係・価値観＞』サイエンス社、170-174ページ。
- 7) 吉田充（2009）「キャンプ体験が短期大学生の自尊感情と社会的スキルに与える影響」『國學院短期大學紀要』第24号、3-14ページ。
- 8) 市河勉・三宅孝昭・新戸信之（2013）「キャンプ体験が保育専攻学生の社会的スキルに及ぼす影響について」『松山東雲短期大学研究論集』第43号、55-61ページ。
- 9) 高山昌子（2009）「大学生の組織キャンプの効果に関する一考察」『太成学院大学紀要』第11号、85-95ページ。
- 10) 谷井淳一・藤原恵美（2001）「小・中学生用自然体験効果測定尺度の開発」『野外教育研究』第5巻1号、39-48ページ。
- 11) 平野智之・植野友紀子・海野孝（2011）「組織キャンプ体験が大学生の自己効力感と無気力に及ぼす効果」『大学体育学』第8号、43-54ページ。
- 12) 亀岡正睦（1992）「『ふきだし法』による子への対応に関する研究Ⅰ」『日本数学教育学会会誌』第74巻4号、87-93ページ。
- 13) 松本奈緒（2015）「中学校段階の体ほぐしの運動における学習者の概念形成－ふきだし法による自由記述とインタビューの分析を通して－」『体育科教育学会』第31巻2号、1－16ページ。
- 14) 本研究では1日1枚の調査用紙を配布し、1枚の用紙に四つのふきだしを用意した。
- 15) 川喜田二郎（1970）『発想法〈続〉－KJ法の展開と応用－』中公新書。



## 研究論文

大学運動部に対する ASE プログラムが集団凝集性に及ぼす影響  
 — 新生と在学生の比較から —

The effect of an ASE program on the group cohesiveness of a college sports team  
 — Comparison of freshmen and senior students —

徳田真彦（北翔大学） 伊原久美子（大阪体育大学）  
 加藤佑一（桃山学院大学） 高橋宏斗（大阪体育大学大学院）  
 久田竜平（大阪体育大学） 田淵洋勝（大阪体育大学大学院）  
 飯田輝（大津市立葛川少年自然の家）

Masahiko TOKUDA · Kumiko IHARA · Yuichi KATO · Hiroto TAKAHASHI ·  
 Ryuhei HISATA · Hiromasa TABUCHI · Hikaru IIDA

The purpose of this study was to examine the effects of an ASE (Action Socialization Experience) program on group cohesiveness between new and senior students on a American football team. Group cohesiveness is the degree to which members are attracted to each other and are motivated to stay in the group. The subjects were fourteen new and twenty-eight senior university students who participated in the ASE program. The Group Environment Questionnaire developed by Carron et al. (1985) was used. In the field of sport psychology, one of the most widely used multidimensional measures of cohesion is the Group Environment Questionnaire. The scale consists of four subscales: Individual Attractions to the Group-Task (ATG-T), Individual Attractions to the Group-Social (ATG-S), Group Integration-Task (GI-T), and Group Integration-Social (GI-S). The scales were administered before and after the ASE program, and approximately one month later. Statistical analyses were performed using one-way and two-way ANOVAs. The following results were obtained:

- 1) The participants showed significant development in all aspects of "group cohesiveness."
- 2) The new university students showed significantly higher scores on the Group Integration-Task subscale, compared to the senior university students.
- 3) The remaining activities to the impression, the risk and degree of difficulty was high activity.
- 4) Influences factors for each group cohesive are fear and failure, cooperation and achieve experience.

Keywords :

ASE (Action Socialization Experience), Comparison of Grade, Group cohesiveness, College sports Club

## 1. 緒言

ASE (Action Socialization Experience) は、現在では多くの野外教育現場に取り入れられるよう

になってきている。ASE とは「社会性を育成する  
 実際体験」とも呼ばれ、個人では解決できない課題に対して、グループのメンバー同士が協力しな

から課題を解決していく活動とされている<sup>1) 2)</sup>。ASE という名称の他、イニシアティブゲーム、課題解決型ゲーム、仲間づくりゲームなど、様々な呼ばれ方が野外教育現場でなされている。ASE プログラムを通して、協調性やコミュニケーション能力、課題解決能力、創造性といった様々な能力の育成にアプローチすることが可能であり、目的に合わせた多様な活用法があることが、今日多くの野外教育現場に取り入れられている理由の一つであると考えられる。近年の特徴的な ASE プログラムの動向として、企業の新入社員研修や、スポーツチームのチームビルディングにも用いられるようになってきており、コミュニケーション能力の育成や、協働意欲の醸成、信頼関係および凝集性の向上などが期待されている<sup>1)</sup>。

ASE に関する研究を概観すると、井村らは、サッカー S 級コーチ 18 名を対象に、ASE プログラムを実施し、心拍数の測定および、班の雰囲気調査を行っている<sup>3)</sup>。その結果、班の雰囲気が有意に改善されていることを報告している。福富らは、ASE プログラムを取り入れたキャンプに参加した、サッカーのクラブチームに所属する中学生の男子 23 名を対象に、チームの雰囲気尺度を用いて調査を行った。その結果、チームの雰囲気が良くなることを明らかにしており、また、チームの雰囲気が良化されるまでのプロセスとして、コミュニケーションの深化や信頼関係の構築、チーム規範行動の改善など、様々な個人やチームの変容が起こっていることが明らかになったと述べている<sup>4)</sup>。加藤らは、サッカースクールが実施した合宿に参加した、小学校 5・6 年生 38 名および、ASE 活動に参加した小学校 5・6 年生 37 名に対して、受容感尺度の調査を行っている。その結果、ASE プログラムは児童の友達からの受容感（存在理解、安心感、対話、疎外感）の向上および改善に効果があることを報告している<sup>5)</sup>。さらに伊原らは、大学アメリカンフットボール部 29 名に ASE プログラムを実施し、集団凝集性の調査を行っている。その結果、人間関係のまとまりや課題遂行に向かったのまとまりに関する集団凝集性に効果があることを報告している<sup>6)</sup>。飯塚は、イニシアティブゲーム体験により、児童の「共感・援助的関わり」といった対人関係スキルが育成され

たことを報告している<sup>7)</sup>。小田らは、イニシアティブゲームがメンタルヘルスへ及ぼす影響について検討しており、大学 1 年生 240 名を対象に調査を行っている。その結果、イニシアティブゲームを通じた情緒的体験や友人との関係性がメンタルヘルスに関して肯定的な影響を及ぼすことを示唆している<sup>8)</sup>。以上をまとめると、集団の雰囲気や受容感、集団凝集性、対人関係スキル、メンタルヘルスなど、プログラム参加者の心理的側面にアプローチした研究がほとんどである。それらの報告の中で、ASE を通して自分自身と向き合う体験や、他者から受け入れられる体験、コミュニケーション能力や体力を再認識する体験、活動とふりかえりを行う中での信頼関係の構築といった要因が、それらの効果を生む要因として報告されている。また、ASE プログラムの「ウォール」、「鹿追い」というアクティビティにおいて参加者の心拍数が最も高まったこと、各アクティビティの取り組み方、個人の役割や行動内容によって心拍数に差があったといった、生理学的側面にアプローチした研究や、ASE プログラムの体系化を目的に、各アクティビティの評価を行った研究なども見られる<sup>3) 9)</sup>。しかしながら、上記に挙げた研究のほとんどは資料論文、研究発表に留まっており、研究数も少ない。ASE プログラムに期待される効果は多く挙げられているにも関わらず、その効果検証は十分なされていないのが現状である。

一方、集団スポーツ競技の成績に大きく関わる要素として、個々人の競技能力に着目された研究がなされているが<sup>10) 11)</sup>、他方ではチームワークも成績に関わる重要な要素として研究がなされている。チームワークの心理的側面として代表的な概念が「集団凝集性」である。集団凝集性とは最初に Lewin によって用いられた、集団のまとまりを示す概念であり、集団のメンバーを集団に留めようとする力と、集団を壊そうとする力に抵抗する力によって生み出されると考えられている<sup>12)</sup>。過去の研究では集団凝集性を対人魅力という単一の次元にて評価されてきたが、近年では対人魅力は集団凝集性を構成する単一の次元ではないと反論がなされ、課題—社会、個人—集団と、大きく 2 つの次元で集団凝集性を扱う研究が主流となっている<sup>13) 14)</sup>。そのような中で、今日では

「集団のメンバーが集団に対して持つ魅力」と集団凝集性は定義されている<sup>15)</sup>。以上のような研究背景から、集団凝集性の代表的な研究者である Carron, A.V. は、スポーツ集団における集団凝集性の概念モデルを提起している(図1)<sup>13)</sup>。さらに Carron, A.V. は過去の先行研究からメタ分析を行い、集団凝集性とチームパフォーマンスは正の関連性があることを報告している<sup>16)</sup>。国内においても、集団凝集性に関する研究は多くなされており、集団が競技志向であるか、レクリエーション志向であるかといった集団の志向や、メンバーの親密性、チームへの誇り、チームの競技レベルへの認知といった要因が集団凝集性に影響を与えること<sup>17) 18)</sup>、大学運動部において、上級生のほうが下級生よりも集団凝集性が高いことが明らかになっている<sup>19)</sup>。また、集合的効力感、パフォーマンスと正の関連性があることや<sup>20)</sup>、集団規範との間に相関関係が見られること<sup>21)</sup>、部活動への参加率を高めることなどが明らかになっている<sup>22)</sup>。この他、集団スポーツ競技を取り巻くさまざまな要因と関連付けられながら、集団凝集性の研究が進められている<sup>23) 24) 25) 26) 27)</sup>。このことから集団凝集性が集団スポーツ競技におけるパフォーマンス向上の一因となっていることがわかる。

野外教育分野においても、集団凝集性の研究はいくつか見られる。高畑らは、ふりかえり活動が集団凝集性に及ぼす効果について検討し、大学キャンプ実習へ参加した79名に調査を行っている<sup>28)</sup>。その結果、ふりかえり活動を行った参加者の

方が行わなかった参加者より集団凝集性が向上したことを報告している。井村らは、フロンティア・アドベンチャー体験が参加者の自己概念と集団凝集性に及ぼす影響について検討しており、参加者の小中学生50名に対して調査を行っている。その結果、年齢幅の大きい異年齢集団では、班内の凝集性は高まらない傾向にあることを報告している<sup>29)</sup>。大杉らは、教育キャンプに参加した大学生29名を対象に、集団凝集性、チーム効力感、自己効力感について調査しており、キャンプを通して各変数が向上したこと、登山とASEプログラムが3変数全てに強く影響していることを示唆している<sup>30)</sup>。以上、いくつか研究は見られるが、野外教育分野で集団凝集性を扱った研究は始まったばかりであり、どのような要因が集団凝集性に影響を及ぼすのかは未だ未解明な部分が多いのが現状である。キャンプ活動の特性である、集団生活の中で起こる、成功、失敗、協力、葛藤といったさまざまな体験は、まさに集団凝集性の向上に適した環境であると考えられるが、ASEプログラムにおいても、自然の中での教育を都市部において再現するという理念のもと発展を遂げてきたことから、キャンプ活動と同様の要素を持っていると考えられる。また、先行研究により、上級生、下級生といった学年の違いによって凝集性が異なることが明らかになっていることから<sup>19)</sup>、ASEプログラムの効果も学年によって異なることが考えられるが、ASEプログラムの効果の違いを学年の違いの観点からアプローチした研究は見当たらない。そこで本研究では、大学運動部を対象に、

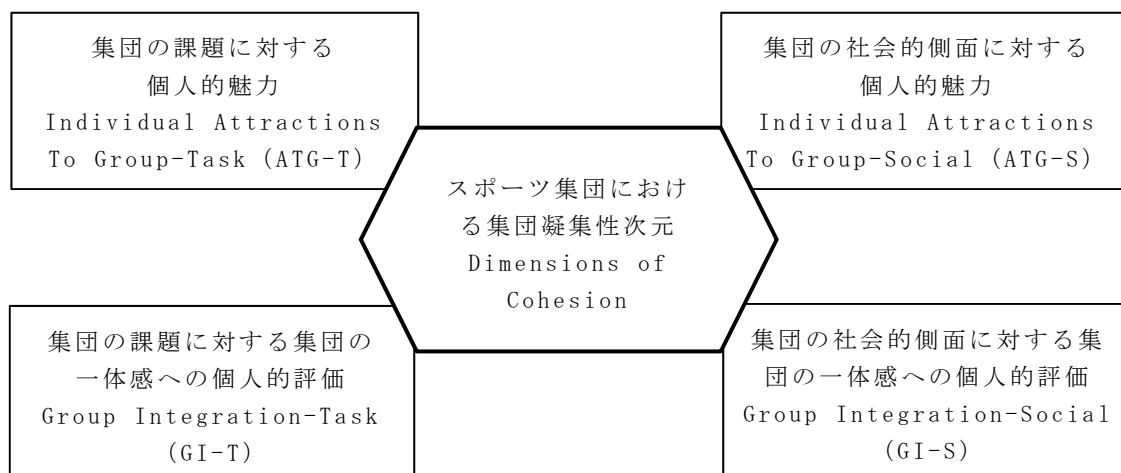


図1 集団凝集性の概念モデル (Carron, A, V1998 の図を一部加筆)

ASE プログラムが集団凝集性に及ぼす影響について着目することとした。

本研究の目的は、A 大学アメリカンフットボール部を対象に、ASE プログラムが集団凝集性に及ぼす影響および、新入生と在生に対する効果の違いを明らかにすることである。

## 2. 研究方法

### 2.1. 調査対象および手続き

本研究の調査対象は、2015 年 3 月 6 日および 2015 年 3 月 10 日に行われた A 大学アメリカンフットボール部 ASE プログラムに参加した新入生 14 名、在生 28 名（3 年生 15 名、4 年生 13 名）の計 42 名を対象とした（男性 38 名、女性 4 名）。A 大学アメリカンフットボール部は関西学生アメリカンフットボールリーグにおいて 1 部に所属し、部長・監督・ヘッドコーチ・トレーナーおよびポジション別に専属コーチが付き、日常的に部活動が行われている。「一部残留」という目標を持ちつつ、指導者の指導の下、部活動に取り組んでいる現状から、一般的な大学運動部として採択することとした。調査実施に先立って、A 大学アメリカンフットボール部監督に調査協力を依頼し、調査承認を得た。さらに調査当日、調査対象者には調査に関する説明を行い、調査協力の同意を得た。調査はプログラムが始まる開講式直前（pre）と、プログラムが終わる閉講式直前（post1）、プログラム終了 1 ヶ月後（post2）の計 3 回実施した。分析対象者は、データに欠損があった 9 名を除いた新入生 12 名、在生 21 名の計 33 名であった（有効回答率 78.5%）。

### 2.2. プログラムの概要

A 大学アメリカンフットボール部 ASE プログラムは、ASE プログラムを通して選手の特性を知る、チームをまとめるといったチームビルディングを主たる目的として、2014 年から行われている。当該プログラムは 2 年目となるが、1 年目のプログラムは新入生のみ行ったため、本調査対象者の新入生および 3・4 年生は初めてのプログラム参加となる（実際には 4 月から 3 年生、4 年生に昇級するメンバー）。また 2 年生は、昨年度同プログラムを経験しているため、当該年度には

ASE プログラムは実施されなかった。実施時期が 3 月上旬であり、本来新入生が入学していない時期ではあるが、スポーツ推薦者、特待者が練習に参加しており、新入生同士はほぼ初対面という状況であった。2 回の実施の内、3 月 6 日は新入生、3 月 10 日は在生が参加し、活動班は学年別に編成され、監督が体格や身体能力を考慮し、1 班 7 名から 8 名の班に分けてプログラムを行った。活動班には班付きの指導員として 1 名ずつ指導者が同行した。指導者は、野外教育を専門とする大学院生や、学部生が担い、基本的な ASE 指導技術、対人関係スキルを身に付けている人材が指導に当たった。プログラムの実施に当たって、参加者の年齢や体力、人数、運動能力を考慮し、アクティビティの課題を設定した。より積極的にプログラムへ参加する働きかけとして、課題設定およびアクティビティそのものに内在するリスクから、星 1 つ（☆）から星 3 つ（☆☆☆）の達成難易度を設定し、どれだけ星の数を集められるかを各グループで競うような運営方法を取った（星の数が多い程、達成が難しい）。プログラムの午前 3 時間は、アイスブレイキングを含め、ヘリウムフープ、パイプライン、蜘蛛の巣といった比較的達成難易度が低いアクティビティを行い、昼食を挟んで午後 3 時間はエレクトリックフェンス、バックフライ

表 1 ASE プログラム

時間	プログラム	ASE内容
9:00	開会式・アイスブレイキング	アメーバ
~	午前ASEプログラム	モンスター スカイツリー ヘリウムフープ お好み焼き 日本列島 パイプライン 熊のつめ ニトロ ラインナップ 蜘蛛の巣 など
12:00		
13:00	昼食	
~	午後ASEプログラム	クロスリバー インディージョーンズ 大脱出 ビーム エレクトリックフェンス バックフライング など
16:00	振り返り・閉会式	

ング、チームといった午前に比べ達成難易度が高いアクティビティを行った(表1)。なお、当該プログラムは新入生、在学生共にチームビルディングを目的として同様の流れで行われた。

## 2.3. 調査内容

### 2.3.1. 集団凝集性

本研究では、スポーツチームの凝集性を測定するために作成された質問紙尺度の中で、スポーツ心理学の研究で最も広範に利用されている集団環境質問紙(Group Environment Questionnaire: 以下GEQ)の翻訳版尺度(織田ら2007)を使用した。この測定尺度は、18の質問項目で成り立っており、課題凝集(集団の目標とする課題を達成することを目的に凝集する)と、社会凝集(集団内での対人関係に魅力を感じ、そこでの仲間同士の交流による情緒的な満足感を得ることを目的に凝集)の2つの側面を、選手個人として感じている魅力と、チーム全体がどうであるかという認識の2つの側面から測定し、2×2の4つの次元で捉えられるようになっている(表2、表3)。4つの次元とは、チーム内の個人が、所属チームの課題遂行にどの程度魅力を感じているかを表す「ATG-T」、チームの個人が、他のメンバーと

の人間関係にどの程度魅力を感じているかを表す「ATG-S」、所属チームがどの程度課題遂行に向かってまとまっているかを表すGI-T、所属チームがどの程度人間関係に関する事でまとまっているかを表す「GI-S」である。回答形式は、「全く違う」(1点)から「全くその通りだ」(9点)の9段階によって評価するように求めた。

### 2.3.2. ふりかえりシート

ASEプログラムの評価および、参加者がASEプログラムを通してどのようなことを感じているのかを把握し、本調査結果に関してより深い考察を行うために「ふりかえりシート」を作成した。ふりかえりシートはA4サイズの用紙に質問項目が載せてあり、参加者は質問に対して、自由に感じたことを記述するといった内容であった。質問項目は、①「今日の活動を振り返って、次にあげる力がどの程度身に付いたと思いますか(自ら考える力、仲間と協力する力、リーダーシップ)」(以下、成長質問)、②「今日、一番印象に残った体験は何ですか。それはなぜですか」(以下、印象質問)、③「今日のプログラムで感じた自分の強み(良いところ、優れているところ)は何ですか」(以下、長所質問)、④「今日のプログラムで感じ

表2 GEQの下位因子

ATG-T	集団の課題に対する個人的魅力
ATG-S	集団の社会的側面に対する個人的魅力
GI-T	集団の課題に対する一体感への個人的評価
GI-S	集団の社会的側面に対する一体感への個人的評価

表3 GEQの質問項目

項目数	質問項目	下位因子
1	試合のとき、自分の出場時間に満足している	ATG-T
2	チームが試合に勝とうとする意欲に満足している	ATG-T
3	このチームは自分のパフォーマンスを伸ばす機会を十分に与えてくれる	ATG-T
4	このチームのプレースタイルが気に入っている	ATG-T
5	チームメンバーとの付き合いは楽しい	ATG-S
6	シーズンが終わって、チームのメンバーと会わなくなるのと寂しい	ATG-S
7	親しい友人がチームの中に数人いる	ATG-S
8	チーム以外の者との付き合いよりも、チームメンバーとの付き合いのほうが楽しい	ATG-S
9	このチームでの活動は自分が所属している集団の中でも最も大切な集団のひとつである	ATG-S
10	われわれのチームは一致団結して目標を達成しようとしている	GI-T
11	われわれのチームは、試合で負けたり成績が思わしくない時は、チームメンバー全員が責任を感じる	GI-T
12	われわれのチームのメンバーは、チーム目標が一致している	GI-T
13	われわれのチームは、練習中にうまくできないメンバーがいるとき、メンバー全員でサポートする	GI-T
14	われわれのチームメンバーは、試合や練習の時、それぞれの役割や責任などについて遠慮なく話し合う	GI-T
15	われわれのチームは、それぞれで出かけるよりも、チームメンバーと一緒に出かけることを好む	GI-S
16	われわれのチームは、チームメンバー同士でパーティ(飲み会・食事会など)をよくひらく	GI-S
17	われわれのチームはシーズンオフの時でもチームのメンバーと一緒に過ごしたいと思っている	GI-S
18	われわれのチームは、試合や練習以外の時でも仲が良い	GI-S

た自分の弱み（良くないところ、これから鍛えたいところ）は何ですか」（以下、短所質問）、⑤「今日のプログラムで感じたチームの一番の変化は何ですか。その変化はどのような場面で感じましたか」（以下、チームの変化質問）、⑥「今後、チームに対してどのように関わっていきたいですか」（以下、関与質問）といった内容であった。成長質問に関しては、自ら考える力、仲間と協力する力、リーダーシップの3つについて質問し、それぞれ、「あまり身につかなかった」から「かなり身についた」の4段階で評価するよう求めた。

## 2.4. 分析方法

### 2.4.1. 集団凝集性の分析

分析に先立ち、記述統計量として質問項目から、下位因子の平均値を因子得点として算出した。続いて、ASEプログラムによる集団凝集性の変容について明らかにするために、事前（pre）、事後（post1）、1ヶ月後（post2）での1要因分散分析を行った。有意差が見られた項目には多重比較を行った。さらに、学年による集団凝集性の変容の違いを明らかにするために、新入生（n=12）と在学生（n=21）の群に分け、学年と調査期間（以下、期間）の、2要因混合計画による分散分析を行った。交互作用が見られた項目には単純主効果の検定、多重比較を行い、主効果のみが見られた項目には多重比較を行った。全ての有意水準は5%以下とした。全ての分析は統計ソフト IBM SPSS Statistics22を使用した。なお、先行研究に則り、プログラム前の集団凝集性得点とプログラム終了

後の集団凝集性得点を比較した際、プログラム終了後の得点が上回っていた場合に、集団凝集性が「向上した」と捉えることとする。

### 2.4.2. ふりかえりシート

成長質問、長所質問、短所質問に関しては、最後のふりかえり活動で扱うことを目的として調査した項目であることや、個人に焦点を当てた質問であることから、本研究では扱わないこととした。印象質問に関しては、記述内容を取りまとめた。チームの変化質問、関与質問に関してはKJ法の手法を参考に、整理・集約を行った。自由記述で得られた回答から、参加者の様子を表している言葉を名刺サイズのカードに書きだし、同じ単語や内容を含むカード同士をまとめ、カテゴリーとして集約を行った。なお、筆者の分析が一貫した視点で行われているか共同研究者が分析過程を確認し、他の解釈が生じた場合には、意見が一致するまで議論を行うことにより確実性を担保した。共同研究者は当該ASEプログラムへ指導者として参加していた、野外教育を専門とする大学院生3名であった。これより得られたカテゴリーから、ASEプログラムを通してどのような体験をしているのか、その特徴を明らかにすることとした。

## 3. 結果

### 3.1. 参加者全体の集団凝集性の変容

参加者全体（n=33）のASEプログラム前からプログラム後、1ヶ月後にかけての集団凝集性得点の変化を、各下位因子の合計点を用いて、1要

表4 GEQの結果（全体）

下位因子	pre		post1		post2		F値	多重比較
	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD		
ATG-S (n=33)	6.60	1.44	7.30	1.23	7.00	1.11	8.55 **	pre<post
ATG-T (n=33)	6.17	1.63	6.67	1.57	6.93	1.23	6.78 **	pre<post pre<post1
GI-S (n=33)	5.59	1.47	6.51	1.47	6.23	1.29	10.84 ***	pre<post pre<post1
GI-T (n=33)	7.13	1.20	7.73	0.93	7.59	0.94	5.16 **	pre<post pre<post1

\*\*\*p<.001, \*\*p<.01



因分散分析を行った。その結果、プログラム後にはプログラム前に比べて、すべての下位因子で有意な向上が認められた (ATG-S:F[1,32]=8.55,p<.01, ATG-T:F[1,32]=6.78,p<.01, GI-S:F[1,32]=10.84, p<.001, GI-T:F[1,32]=5.16,p<.01)。さらに、1ヶ月後の得点が下がっている因子もあるものの、有意な低下は認められなかったことから、ASEプログラムが集団凝集性の向上に有効であると捉えることができる (表 4)。

### 3.2. 新入生と在学生の集団凝集性の比較

新入生と在学生の集団凝集性の変容を比較するために、各下位因子を学年と期間の2要因混合計画による分散分析を行った。その結果、GI-T (課題的側面に対する集団の一体感) にもみ交互作用が有意傾向であった (GI-T:F[1,31]=2.62,p<.10)。すなわち所属チームがどの程度課題遂行に向かってまとまっているかという評価に関して、新入生のほうがより向上している傾向が見られた。また GI-T 以外の下位因子においても、期間の主効

表 5 GEQ の結果 (学年別)

下位因子	新入生n=12 在學生n=21	pre		post1		post2		F値	多重比較	主効果		交互作用
		Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD			期間	学年	
ATG-S	新入生	6.18	2.10	7.00	1.70	6.90	1.28	2.43 †	pre<post	8.51 **	1.12	n.s
	在學生	6.82	0.85	7.49	0.87	7.07	1.01	9.61 ***	pre<post post>post1			
ATG-T	新入生	5.63	1.91	6.65	1.62	6.69	1.35	3.98 *	pre<post	7.87 **	.80	n.s
	在學生	6.48	1.41	6.69	1.58	7.07	1.16	3.72 *	pre<post2			
GI-S	新入生	5.29	1.72	6.67	1.94	6.35	1.64	7.22 **	pre<post pre<post1	12.8 ***	.00	n.s
	在學生	5.76	1.33	6.42	1.17	6.17	1.07	4.23 *	pre<post			
GI-T	新入生	6.72	1.64	7.77	1.15	7.72	1.20	4.90 *	pre<post	7.05 **	.22	2.62†
	在學生	7.37	0.80	7.71	0.81	7.52	0.77	n.s	-			

\*\*\*p<.001, \*\*p<.01, \*p<.05, †p<.10

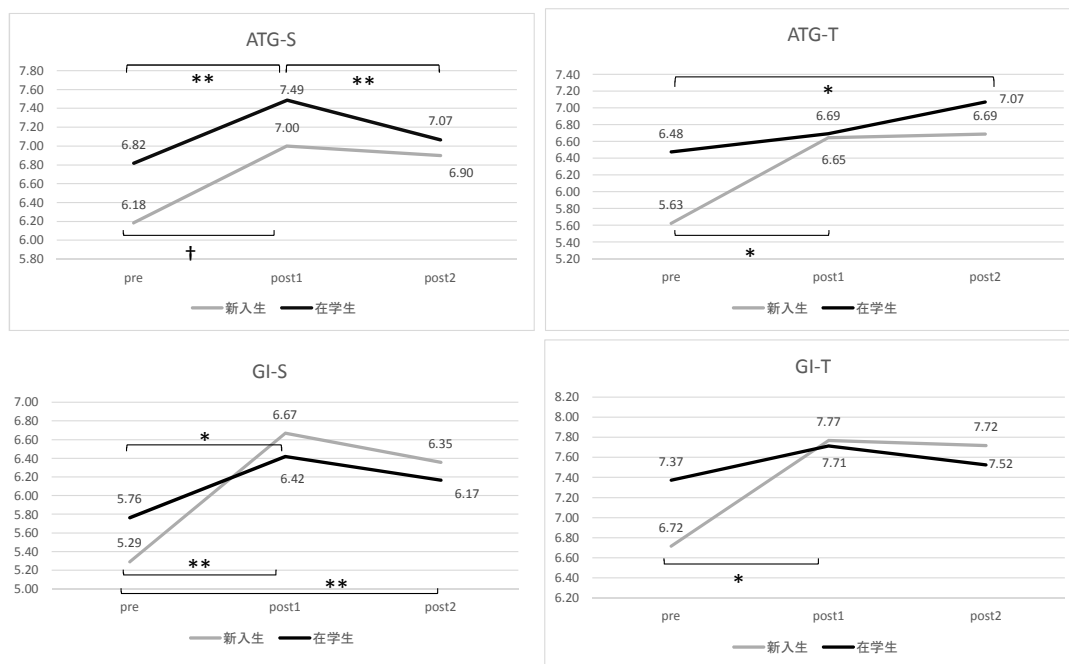


図 2 集団凝集性の変容結果 (学年別)

果が認められたことから、多重比較を行った。その結果、新入生は ATG-S（集団の社会的側面に対する個人的魅力）、ATG-T（集団の課題に対する個人的魅力）、GI-S（社会的側面に対する集団の一体感）に関して、プログラム終了後に有意な向上が見られた（ATG-S:F[1,31]=2.43,p<.10, ATG-T:F[1,31]=3.98,p<.05, GI-S:F[1,31]=7.22,p<.01）。在學生は ATG-S に関して、プログラム終了後に向上し、1ヶ月後に低下している結果となり、GI-S に関してはプログラム終了後に向上している結果となった（ATG-S:F[1,31]=9.61,p<.001, GI-S:F[1,31]=4.23,p<.05）。また ATG-T に関しては（ATG-T:F[1,31]=3.72,p<.05）、pre から post2 において有意な向上が認められた（表 5、図 2）。学年で比較すると、交互作用は認められなかった因子が多いものの、新入生が在學生と同等の得点、もしくはそれ以上に得点を向上させていることが見て取れる結果となった。

3.3. ふりかえりシートの結果

3.3.1. 印象的なアクティビティ

印象質問の記述内容をまとめた（表 6、表 7）。記述されたアクティビティで特に多かったのが、

「チーム」、「大脱出」、「バックフライング」、「エレクトリックフェンス」であり、リスクや難易度の高いアクティビティがより印象に残っている結果となった。また、なぜ印象に残ったのかという理由については、記述内容から「事故」、「失敗体験」、「恐怖」、「困難さ」、「達成感」、「信頼」、「協力」の 7つのカテゴリーに分けられた。

3.3.2. ASE プログラム参加者の体験

ふりかえりシートから KJ 法の手法を参考にし、グルーピングを行った結果、以下のように分けられた。

表 6 印象に残ったアクティビティ

アクティビティ名	記入数
チーム	12
大脱出	7
バックフライング	6
エレクトリックフェンス	6
スラックライン	4
ラインナップ	3
蜘蛛の巣	3
インディジョーンズ	2
キーパンチ	2
アメーバ	1

表 7 印象に残った理由

カテゴリー	コメント
事故	仲間が落ちたから
	プロレス技みたいになったから
	頭から落ちて首が痛かったから
失敗体験	全員で成功できなかったから
	最後の一人ができなかったから
恐怖	上の高さからでも怖かったから
	怖かった(2)
困難さ	一番危険で怖かったから
	とても難しかった(2)
達成感	みんなで達成してうれしかった(5)
	最短で達成できたから
	とても早く達成できたから
	体格差がありながらも達成できたから
	できた時のみんなの喜びがすごかったから
	難しかったけど達成感が一番あった
	新記録が出せたから(2)
信頼	できないと思ったけど達成できたから(4)
	全員で目標を達成できたから
	1つになって解決できたから
	恐怖に打ち勝ち仲間を信頼することが一番分かったゲームだったから
協力	周りの人を信じた
	チームから支えられ、自分も支えることができたから
協力	仲間を信用できたから
	みんなで協力できたから(4)
協力	みんなで考えて協力したから

( )内の数字は同様のコメントの数

チームの変化質問のグルーピングに関して、新入生は「チームワーク」、「関係性の構築」、「発信・傾聴」の計3つのカテゴリーが生成された(表8)。

在學生は、「協力」、「発信・傾聴」、「柔軟性」、「真剣さ」、「克己心」、「積極性」の計6つのカテゴリーが生成された(表9)。チームの変化として、

表8 チームの一番の変化(新入生)

カテゴリー	コメント
チームワーク	協力できた
	チームワークが良くなった
	午後からまとまりが強くなった
	みんなの団結力が強くなった
	課題が難しくなっていくにつれ、一つになっていった
関係性の構築	みんなが声を掛け合って集中した
	皆が仲良くなれた(3)
	話していくうちに仲良くなった
発信・傾聴	一人ひとりが意見を言えるようになった
	意見を出し合えるようになった
	「どうしょ」に対する答えが増えた

( )内の数字は同様のコメントの数

表9 チームの一番の変化(在學生)

カテゴリー	コメント
協力	チームワークが深まった(4)
	結束力が高まった
	最後に一つになれた
	今までメンバーでした事のない事ができて一層仲良くなれた
	ゲームで協力して行動できた
	仲間と協力する力
	プログラムをやっていくにつれてチームがまとまっていったと思う
	初めはバラバラだったが、最後にはしっかり集中できた
	学年での一体感がさらに深まった
	こんなにチームメイトと話したことがなかった(2)
発信・傾聴	全員が知恵を出し合っていた
	アイデアを出し合えた
	意見を思った通り周りに伝えることができた
	みんなが一人ひとり意見を出し合った
	チームメイトを協力して励ますようになった
	意見をして意見を聞くようになった(2)
柔軟性	みんな誰かに気を使うことなく発信できていた
	アドバイスを素直に受け入れるようになった
	その場その場で対応できるようになった
真剣さ	みんなが急に頭を使って、課題を達成できた
	全員が一つの事に向けて真剣に取り組めた(2)
	全員が目標に向かって真剣に考えた
	いろいろやっていく中で真剣になっていった
克己心	全て最後まで成功させたいという気持ちがあった
	妥協しなくなった
	自分に厳しくできていた
積極性	内心あきらめた時もあったが、周りの支えもあり最後までやり抜くことができ、あきらめない力が身に付いた
	まずはやってみようと思えるようになった(2)
	初めから無理と思わずに、考え「やってみよう」という気持ちを持てた

( )内の数字は同様のコメントの数

表 10 今後どのように関わっていききたいか (新入生)

カテゴリー	コメント
努力	真剣に部活動に取り組んでいきたい
積極性	チームが同じ方向に向かっていくように伝えていきたい 積極的に自分から関わっていきけるようにしたい
貢献	チームのプラスになれるように関わっていききたい 少しでも力になりたい チームのプラスになって自分が主力選手になりたい どんな形でもいいから頼りになる存在になりたい
チームワーク	よいチームになっていきたい これからも絆を深めていきたい
協力	4年間協力して頑張りたい 力を合わせて頑張っていきたい(2) みんなで協力しあいたい 今日の体験のように一緒に考え協力できるようになりたい

()内の数字は同様のコメントの数

表 11 今後どのように関わっていききたいか (在学生)

カテゴリー	コメント
主体性	今日の事を活かしてチームをさらに盛り上げていきたい 勢いをつける存在になる 今後もっとチームの土台となれる存在になる 信頼される存在になりたい もっとリーダーシップを取れるようになる チーム全体を引っ張っていききたい
柔軟性	4回生として、今日の経験を活かして引っ張っていききたい 意見を言い合えるような関係性にしていきたい 周りを見て行動できるようになりたい 第3者の目線で周りを見る どのような状況でも瞬時に対応していきたい
不屈	何事もあきらめずに行動していきたい 何事もあきらめず最後までやりきりたい 辛い事、大変なことがあってもあきらめず支えあっていきたい 逆転できる気持ちを持って、無理なものは無いと信じていきたい どんな状況でもあきらめず、どうしたら成功するかを考えていきたい
協力	仲間たちと協力していろんなことを乗り越えていきたい 何事も協力して頑張っていきたい 今日の経験を活かしてチームワークを良くしていきたい チームのそれぞれの良いところを出し合って協力していきたい 仲間を大切に、みんなで課題を達成していきたい(2)
発信・傾聴	ある程度意見を出していきたい なんでも主張できるようになっていきたい もっと自分の意見を周りに大きい声で伝えていきたい 自分の意見を言えるようにしていきたい 何事も言い合えるように関わっていききたい 自分の考えをどんどん出していきたい 積極的に行動をして意見を出していきたい 人の話をもっと聞き理解したい

()内の数字は同様のコメントの数

新入生は集団のまとまりに関する記述のみであったのに対し、在學生は集団のまとまりに関する記述に加え、個々の変化に関する記述も見られる結果となった。

関与質問のグルーピングに関して、新入生は「努力」、「積極性」、「貢献」、「チームワーク」、「協力」の計5つの下位カテゴリーが生成された(表10)。在學生は「主体性」、「柔軟性」、「不屈」、「協力」、「発信・傾聴」計5つのカテゴリーが生成された(表11)。新入生の記述は、チームへの貢献や、協力といった集団に関わる記述がほとんどであったのに対し、在學生はリーダーシップや、発信力といった個々人の能力に関する記述が多く見られた。

#### 4. 考察

##### 4.1. ASE プログラム参加者の集団凝集性の変容

参加者全体の集団凝集性の変容は、プログラム前後において下位因子すべてに有意な向上が見られるという結果となった。大杉<sup>31)</sup>は、教育キャンプ参加者の自己効力感、チーム効力感、集団凝集性の変容について検討しており、その中で集団凝集性へ最も影響していたアクティビティがASEプログラムであったことを報告している。さらに、参加者のふりかえりシートからASEプログラム内の、「努力」や「達成」、「協力」、「一体感」、「コミュニケーション」といった要因が集団凝集性へ影響していたことを推察している。このほか、集

団凝集性の向上には、個々のコミュニケーションスキルの向上、集団目標への協力体制、集団目標の認識といった要因が影響するという報告もなされている<sup>18) 24)</sup>。本研究においても、記述内容から「みんなで達成して嬉しかった」、「チームワークが深まった」、「一人ひとりが意見を言えるようになった」などのふりかえりシートの記述から、参加者は「達成」、「協力」、「発信・傾聴」といった体験をしていることが伺え、それらの体験が集団凝集性に影響を与えたものと考えられる。一方、「怖かった」、「とても難しかった」などの記述が見られ、「失敗」、「恐怖」、「困難」といった体験をしていることが伺えるが、「できないと思ったけど達成できた」、「難しかったけど、達成感が一番あった」、「課題が難しくなっていくにつれて、一つとなっていく」といった記述も同時に見られた。冒険教育の学習過程を表したアウトワードバウンドプロセスモデルの中に<sup>32)</sup>、個人、または集団として明確な課題を設定し、その課題に取り組む間に、感情・経験・能力などの面で困難で課題への適応が難しい状況に向き合いながら、グループや指導者からの支え、本人のやる気、取り組み方などの結果、課題解決・成功を体験し、体験をふりかえり、その意味を理解、自己意識の向上、問題解決能力を習得するという過程が含まれている。この学習過程を本研究におけるASEプログラム参加者に当てはめると、失敗や恐怖、困難といった体験は、課題に対して不適応状態が起

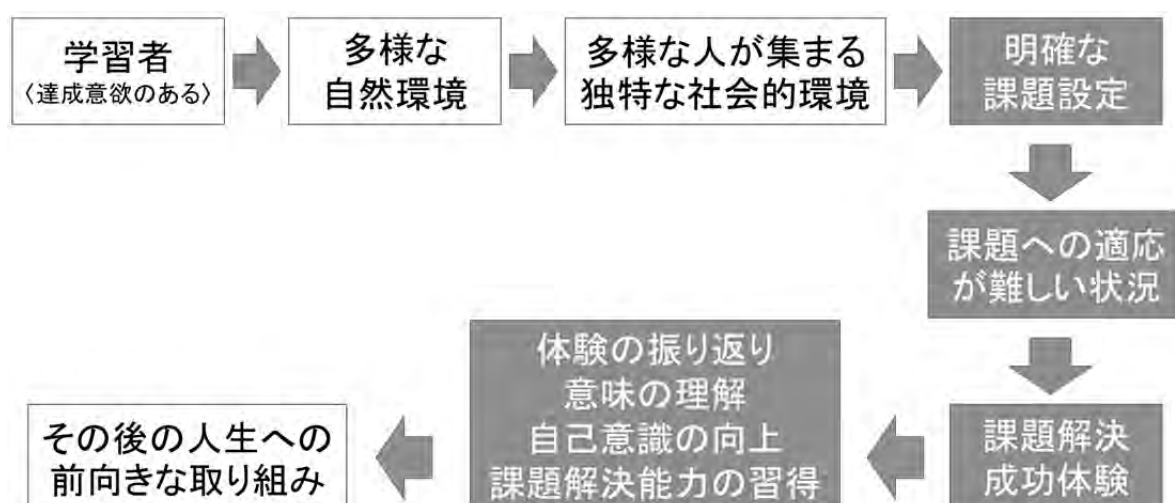


図3 アウトワードバウンドプロセスモデル (Walsh & Golins,1976)

※色塗りの所が本文にて紹介した過程

こっている場面であり、それらを乗り越えようとする際に困難さを感じつつ、達成するために協力し、その結果、達成や成功を体験し、それらの体験をふりかえる中で、課題へ取り組んだプロセスや達成したという結果に、達成感や一体感を感じていると考えられる。

つまり、たとえ「失敗」、「恐怖」、「困難」といった体験をしていたとしても、それは課題解決や協力へと繋がる、いわば学習効果を高める重要なプロセスであり、本研究においては、集団凝集性を高める「きっかけ」となっていることが考えられる。このことから、ASEプログラムにおいて集団凝集性を高める要因として、「達成」や「協力」、「発信・傾聴」といった体験の他にも、「失敗」、「恐怖」、「困難」といった体験をすることも重要であると考えられる。

#### 4.2. 新入生と在学生の集団凝集性の比較

新入生と在学生の集団凝集性の変容を比較した結果、GI-T（課題的側面に対する集団の一体感）にのみ交互作用が有意傾向であった。ASEプログラム前は在学生のほうが高い得点を示しているが、ASEプログラム後および1ヶ月後の結果ではGI-Tをはじめとする、各下位因子で新入生が在学生と同程度まで得点を伸ばしている結果となった。青木らは<sup>33)</sup>、自然体験の少ない児童ほど、生きる力の能力要素が高く向上した結果から、体験の強いインパクトが能力向上の要因となったのではないかと指摘している。本研究においても、新入生は初対面のメンバーと、ASEプログラムというチームビルディングを目的とした活動を行ったことで、体験のインパクトが在学生に比べ、より強かったことが考えられる。さらに集団凝集性の向上に関わる要因の一つとしてチームの親密度が挙げられているが<sup>18)</sup>、新入生はほぼ初めて出会ったメンバーとの活動であったことから、新密度に関しては皆無であったことが推察される。しかし、ASEプログラム終了後の新入生のふりかえりシートには、「みんなが仲良くなれた」、「チームワークが良くなった」などの集団のまとまりに関する記述内容が新入生全員から見られた。このことから、初対面で親密ではなかった状況から、ASEプログラムを通して、チームとしての意識が

芽生え、今後のチームとしての課題遂行やチーム内の人間関係に魅力や期待を持ったことが推察される。さらに、今後どのように関わっていききたいかという質問に関しても、「どんな形でもいいから頼りになる存在になりたい」、「よいチームになっていきたい」、「これからも絆を深めていきたい」などの、「貢献」、「協力」に関する記述内容が見られたことから、これからのチームでの活動を前向きに捉えていることが伺える。以上をまとめると、新入生はASEプログラムを通して、集団のまとまりや期待を強く感じ、今後の活動についても前向きに捉え、それらは初対面のメンバーという環境において、強いインパクトとして新入生の心に残り、その結果在学生に比べ集団凝集性が高く向上し、1ヶ月後の調査においても、集団凝集性が維持されたものと考えられる。

一方、在学生に関しては、ATG-S（集団の社会的側面に対する個人的魅力）およびGI-S（社会的側面に対する集団の一体感）の向上が見られた。ATG-Sは言い換えればチーム内の個人が他のメンバーとの人間関係にどの程度魅力を感じているかを表しており、GI-Sは所属チームがどの程度人間関係に関することでまとまっているかを表していることから、両因子とも対人魅力や人間関係に関する因子である。ふりかえりシートから生成されたカテゴリーでは、新入生同様「協力」といったカテゴリーに加え、新入生には見られなかった「その場その場で対応できるようになった」、「全員が一つの事に向けて真剣に取り組めた」などの「柔軟性」、「真剣さ」といったカテゴリーや、「内心あきらめかけた時もあったが、周りの支えもあり最後までやり抜くことができ、あきらめない力が身に付いた」、「初めから無理と思わずに、考え『やってみよう』という気持ちを持てた」などの「克己心」や「積極性」といったカテゴリーが生成された。他のメンバーやチームに対しての情報が乏しい新入生に比べ、在学生は普段のメンバーとの関係性やチームの雰囲気と比較することができることから、チームの課題に対する真剣な取り組みや、メンバーの新たな一面、自分自身の変化や他メンバーの変化などを強く感じたことが考えられる。そのような体験から、改めて自身が所属するチームやメンバーに対する魅力を感じたことが推

察され、ATG-S および GI-S が向上したものと考えられる。

以上をまとめると、ASE プログラムは集団凝集性を高めるのに効果的であり、関係性が構築されていない段階の集団に実施することで、課題遂行に関するチームの一体感や信頼感を醸成する「きっかけ」となることが考えられる。一方、関係性が構築されている集団にとってもメンバーの新たな一面を発見する機会となり、集団に対して改めて魅力を感じさせる機会となっていることが考えられる。今後は、より詳細に ASE プログラムを通して、参加者がどのような体験をしているのかといった点や、アクティビティの特性を考慮した体系的なプログラム展開などを検討し、学年による変容の差異の要因を明らかにしていく必要があるだろう。

#### 4.3. 印象に残ったアクティビティについて

印象に残ったアクティビティについては、よりリスクや難易度を高く設定したアクティビティが参加者の印象に残っている結果となった。ふりかえりシートの記述では、「一番危険で怖かったから」、「全員で成功できなかったから」、「とても難しかったから」、「できないと思ったけど達成できたから」などの記述が見られ、体験を通じた恐怖や失敗、それらを乗り越えるための協力体験や信頼体験、乗り越えた際の達成感が参加者の心を揺さぶる大きな要素となっていることが考えられる。しかしながら、それぞれのアクティビティの特性や、集団凝集性の関連に関しては、十分に分析できたとは言えず、今後さらに研究を深めていく必要があるだろう。

#### 5. 結論

本研究の目的は ASE プログラムが集団凝集性に及ぼす影響および、新入生と在生に対する効果の違いを明らかにすることであった。その結果、以下の知見を得た。

- 1) ASE プログラムを通して参加者の集団凝集性は向上した。
- 2) 新入生と在生学生の集団凝集性の変容には違いがあり、新入生、在生とともに集団凝集性を向上させつつも、特に新入生に対して

高く向上する傾向が見られた。

- 3) ASE プログラム参加者は、「チーム」、「大脱出」、「バックフライング」、「エレクトリックフェンス」といったリスク、難易度を高く設定したアクティビティが強く印象に残っていることがわかった。
- 4) ASE プログラムは、新入生にとって新たなメンバーとのまとまりを強く感じさせる機会となり、在生学生にとってはメンバーの新たな一面を見つける機会となることが示唆された。

#### 6. 参考文献

1. 星野敏男・金子和正 (2011): 野外教育の理論と実践、杏林書院: 81-86.
2. 星野敏男・金子和正 (2014): 冒険教育の理論と実践、杏林書院: 17-18.
3. 井村仁・飯田稔・田嶋幸三・関根章文 (1999): JFA・S 級コーチ養成コースにおける ASE 活用に関する基礎的研究、野外教育研究、2 (2)、37-42.
4. 福富優・平野吉直 (2014): ASE を取り入れたキャンプ活動がサッカーチームの雰囲気にと及ぼす影響、独立行政法人国立青少年教育振興機構青少年教育研究センター紀要、57-68.
5. 加藤耕己・坂本昭裕・渡邊仁 (2005): A.S.E 参加児童の友達からの受容感に関する研究 - 受容感を規定する因子に着目して -、日本野外教育学会第 8 回大会、研究発表抄録集、36-37.
6. 伊原久美子・徳田真彦・大杉夏葉 (2014): チーム始動時における ASE プログラム導入が集団凝集性に及ぼす影響、日本野外教育学会第 17 回大会、研究発表抄録集、68-69.
7. 飯塚宏一 (2006): 対人スキル向上に向けての手法 - 野外活動におけるイニシアティブゲーム体験の社会的スキル調査から -、宇都宮大学附属中学校研究論集、54 集、50-54.
8. 小田梓・坂本昭裕 (2010): 共通体育「野外運動」におけるイニシアティブゲーム体験が大学一年生のメンタルヘルスに及ぼす影響、大学体育研究、(32)、19-30.
9. 築山泰典・藤井雅人 (2009): 大学導入教育

- における ASE プログラム展開手法に関する一考察、日本野外教育学会第 12 回大会、研究発表抄録集、24-25.
10. Hagger, M. and Chatzisarantis, N (2005) : The social psychology of exercise and sport, Open university press, 167-176.
  11. Gill, D. (1979) : The prediction of group motor performance from individual member ability, Journal of Motor Behavior, Vol.11, No.2, 113-122.
  12. Lewin, K (1943) : Psychology and the process of group living. Journal of social psychology, 17:119-129.
  13. Carron, A.V. Hausenblas, H.A. & Eyes, M.A. (1998) : Group Dynamics in Sport (2nd Ed.) , Fitness Information Technology, 225-263.
  14. Carron, A.V. (1985) The Development of an Instrument to Assess Cohesion in Sport Teams: The Group Environment Questionnaire, Journal of Sport Psychology, 7:244-266.
  15. 中込四郎・伊藤豊彦・山本祐二 (2012) : よくわかるスポーツ心理学、ミネルヴァ書房 : 94-95.
  16. Carron, A.V. Michelle, M. Colman et al (2002) : Cohesion and Performance in Sport, A Meta Analysis, Journal of Sport & Exercise Psychology, 24, 168-188.
  17. 阿江美恵子 (1985) : 集団凝集性と集団志向の関係、および集団凝集性の試合成績への効果、体育学研究、29 (2)、315-323.
  18. 富永徳幸・田口節芳 (2007) : 集団凝集性と競技水準との関連、近畿大学工学部紀要、(人文・社会科学篇)、37、23-29.
  19. 富永徳幸・田口節芳 (2006) : 大学運動部の集団凝集性、近畿大学工学部紀要、(人文・社会科学篇)、36、23-32.
  20. 内田遼介・土屋裕睦・菅生貴之 (2011) : スポーツ集団を対象とした集会的効力感研究の現状と今後の展望：パフォーマンスとの関連性ならびに分析方法に着目して、体育学研究、56、491-506.
  21. 泉井力・宮下文彬 (2014) : 小集団活動における集団凝集性と集団規範の相互作用、龍谷大学経営学論集、53 (3)、1-16
  22. 横山孝行 (2012) : 大学の部活・サークルにおける集団凝集性と参加率に関する研究、東京工芸大学工学部紀要、35 (2)、73-82.
  23. 阿江美恵子 (1987) スポーツ集団の凝集性に関する文献的研究、体育学研究、32 (2) : 117-125.
  24. 織田憲嗣・山本勝昭・徳永幹雄 (2007) : スポーツにおける集団凝集性の構造検証ならびにパフォーマンスとの関係、財団法人ミズノスポーツ振興会、スポーツ医科学研究助成報告書、1-16.
  25. 檜塚正一・五藤佳奈・伊達萬里子ほか (2008) : 集団凝集性と心理的競技能力の関連性について - 大学女子ハンドボール選手の場合 -、武庫川女子大紀要 (人文・社会科学)、56、77-85.
  26. 持田和明・高見和至・島本好平 (2015) : チームスポーツ競技における集団凝集性および集団効力感に影響する個人要因の検討 - 構成員のライフスキルが集団に及ぼす影響 -、スポーツ産業学研究、25 (1)、25-37.
  27. 村瀬浩二・安部久貴 (2014) : 指導者の指導方針が構成員の集団凝集性に与える影響、和歌山大学教育学部紀要 (教育科学)、64、49-54.
  28. 高畑裕司・岡田成弘 (2016) : 大学キャンプ実習におけるふりかえりが参加者の集団凝集性に及ぼす効果、野外教育研究、18 (2)、55-66.
  29. 井村仁・小島哲・諸澄敏之 (1990) : フロントティア・アドベンチャー経験が参加者の自己概念と集団凝集性に及ぼす影響、筑波大学体育科学系運動学研究分野運動学研究、6、77-85.
  30. 大杉夏葉・徳田真彦・福田芳則 (2014) : 教育キャンプが参加者の自己効力感、チーム効力感、集団凝集性に及ぼす影響、日本野外教育学会第 17 回大会プログラム研究発表抄録集、66-67.
  31. 大杉夏葉 (2013) : 教育キャンプが参加者



の自己効力感・チーム効力感・集団凝集性に及ぼす影響、大阪体育大学大学院修士論文（未公刊）

32. Walsh V & Golins G (1976) :The Exploration of the Outward Bound Process, Colorado Outward Bound School, Denver, Colorado:227-234.
33. 青木康太朗・福田芳則・谷ほか（2005）  
水辺活動におけるウォーターワイズプログラムが児童の生きる力に及ぼす効果、野外教育研究、8（2）:59-70.

## 【注釈】本研究で実施した ASE プログラム

アクティビティ名	難易度	説明
アメーバ	☆	参加者代表2名を選出し、代表以外は目隠しをする。さらに参加者全員の足をはちまきで結び、7人14脚の状態にする。その状態で、スタートからゴールまでを歩く。
モンスター	☆	手〇本、足〇本(参加者数で判断)のモンスターを作り、スタートからゴールまで全員が離れることなく歩ききる。全員が繋がった状態でなければ歩くことができない。※手足の基準は基本、手=人数-3、足=人数-3
スカイツリー	☆	薪3本を縦に積み重ねる。その際に一人一本の割りばししか使えない。
ヘリウムフープ	☆	フーフープの周りに立ち、人差し指でフーフープに触れる。そのまま誰一人フーフープから指が離れることなく、参加者の胸の位置程度まで上げる。
お好み焼き	☆	ブルーシートの上に全員が乗る。誰一人ブルーシートから落ちることなく、ブルーシートをひっくり返す。
日本列島	☆	決められたスペース(60cm×60cm程度)の上に全員が乗る。スペースから落ちたり、外に足をつけてしまったら、最初からやり直し。乗ったままで全員で10秒数えられたら達成
パイプライン	☆☆	半筒状のパイプを一人一つ持つ。ビー玉を落とすことなくパイプを繋げていき、ゴールまで行く。
熊のつめ	☆☆	ある一定の高さにはちまきが巻かれている(3m以上)。参加者は協力し、そのはちまきのさらに上にはちまきをまく。参加者は全員何らかの形でかかわれておく(スポット、土台など)。
ニトロ	☆☆	ある一定の範囲を決める(円)。その真ん中に台を設置し、その上にペンキ缶(水入り)を置く。参加者は円に入ることなく、またペンキ缶の水をこぼすことなく円の外まで持っていく。使用できるのはロープ(多数)のみ。
ラインナップ	☆☆	丸太の上に全員が乗る。乗った状態で出されたお題の順に並び替える(身長順、誕生日順など)。その際に下に落ちたり、地面に足が着いたら、最初の状態に戻り、そこから再チャレンジ。
蜘蛛の巣	☆☆	蜘蛛の巣状にロープを張る。参加者はそのロープに触れることなく、間を通り抜ける。一度通った穴は塞がってしまい通れない。誰一人触れることなく、全員がロープの反対側までたどり着いたら達成。
クロスリバー	☆☆☆	ブロック3個、木の板2つを使ってスタートからゴールまで進む。スタート、ゴールの間には川が流れていると仮定し、木の板はそのまま地面に着くと流れてしまうが、ブロックは流れない。これらの原則を考慮しつつ、工夫して渡りきる。途中で木の板が地面についた場合は木の板没収。川に一人でも落ちてしまったらスタートからやり直し。
インディジョーンズ	☆☆☆	木の板1つ、ロープ(多数)を使ってスタート地点からある一定の距離離れている(2.5m程度)宝物を取る。
大脱出	☆☆☆	ロープと木の板を使って、ある一定の距離を飛び越え、脱出する
ビーム	☆☆☆	木の上部(3m前後)に、丸太をセットしておく。参加者は全員が丸太を越え反対側に移動する。完全に反対側に移動した者は反対側にいる参加者をサポートすることは出来ない。ただし、丸太の上にいる場合はサポート可能。
エレクトリックフェンス	☆☆☆	150cm程度の高さに張られたロープ(主に三角形)の内側に、参加者を入れる。ロープから下には電流が流れており、通れない。使える道具は角材1つ。ロープに触れることなく、全員が外側へ脱出する。
バックフライング	☆☆☆	2m程度の高さから後ろ向きに倒れる。他の班員は落ちてくる人をキャッチする。

※難易度は対象者の年齢や体力、人数、運動能力、アクティビティに内在するリスク等を考慮し、設定した。なお、☆の数が多いほど難易度が高い

# 講演録



## 講演録

## 自然と手を入れた自然（園芸）の中で ～人を育てる野菜作り～

藤田智（恵泉女学園大学教授）

この講演録は、2017年6月10日に開催された第21回日本キャンプミーティングでの講演を再編集したものです。

今日の講演のテーマに選んだのは、自然と手を入れた自然です。人の手の入った自然というと人工的なものですが、そういう園芸や家庭菜園などの中で私が実践している、人を育てる野菜作りというテーマでお話をしていきたいと思っています。

### ・はじめに

まず、29歳の私にあった転機についてお話します。この頃お見合いが11回ありました。その結果は2勝9敗です。そして1回もうまくいかなかったんです。

4回ほどお見合いに失敗した頃、何とかしたくて四つ葉のクローバーを探して本に挟んでおいたんです。それでもその後も失敗し続けて、ある時その本を開いてみると見事な押し花になっていたんです。でもその時押し花ではなく、私には枯れているようにしか見えませんでした。そこで今度は、10本ほど四つ葉のクローバーを探してきて、水を入れたコップに10日間ほど挿しておいたんです。すると、なんと根っこが生えてきたんですね。四つ葉のクローバーをただ折って水につけただけなのに、10本中6本に根っこが生えてきたのです。これはその当時の私にとってはうれしく感じられることでした。四つ葉のクローバーのことは、愛や幸せ、ラッキーの象徴と捉えていましたが、そこにこのことによって「根付く」という

イメージが加わったのです。実際お見合いは上手くいかなかったのですが、ちょうどその頃、大学の実習中に足を痛めた学生を介抱したのですが、その学生が今の奥さんです。

いままで野菜から学んだことは本当にたくさんありますが、雑草から学ぶということはそれ以上に大きなものでした。成功の手前に失敗があると四つ葉のクローバーは教えてくれたのです。その失敗を超えていけば新たな道が拓けるということです。それで私は、この四つ葉のクローバーを人生の1つの目標にして生きてきました。

### ・手を入れた自然とそのまの自然

さて、手を入れた自然と全くの自然、どっちが美しいと思いますか？すべてが自然の状態、キャンプ協会のみなさんが活動されるのはこちらかもしれません。農地などがある自然は、手を入れた自然の状態、人工的なものにはなりますが、どちらがいいでしょうか？

1万2～3000年前農業が起こりました。さて、この農業が地球にもたらしたものはなんですか？狩猟中心の生活で、食料を得るために石を持ってマンモスを追いかけたり、木の実を取って食べたりするという不安定な食糧確保の生き方をしていた人間が、定住して種を撒き、植物を育てて、安定した食料を手に入れることができました。しかし、農業は地球に対する最初の環境破壊だとい

う事実もあります。環境破壊と幸福、これ相反するものですね？

ところが21世紀のキーワードを人口、食料、環境とすると、農業（園芸）はこのどれにも関係してくるのです。つまり21世紀のキーワードは農業（園芸）ではないかと私は思っております。そうなったときに農業には2つの側面があると考えられます。1つは生産活動としての農業、園芸。これはこの地球上に人間が生活している限り永遠に不滅です。そしてもう1つが、家庭菜園です。人の心を癒やしたり、人と人とのコミュニケーションをとったり、町を美しくしたりすることを目的とした農業、園芸が実際あるのです。私自身は、昔は前者の農業を主にしてきましたが、最近の後者の農業に力を入れるようになってきました。

そこで次に考えるのは、この後者の農業に力を入れるとどんな効果があるのか、ということです。まず、農家にとって一番いいことは、何も知らない消費者に野菜を作るということを教えると、生産農家の痛さ、苦しみ、辛さ、苦勞が少しでも理解できる消費者を育てるという可能性につながる。それは生産農家と消費者の架け橋になる人材を育てる可能性があるということです。

#### ・農業家としての夢

私が農業、園芸をやるときに、秋田県の農家の出として、大きな2つの夢を持っていました。1つは大きな桃を作るということです。桃と比べてメロンやスイカは大きいので、割って誰かと分けても、自分のところにくる分はそれなりの大きさがありますよね。ところが桃は小さいので、割っても自分には小さなひとかけしかきません。なので、誰かと分けても、それなりの大きさが自分のところにくるくらい大きな桃を作りたかったのです。そしてもう1つの夢が、美しい花の新品種を作って、好きな女性の名前をつけるということです。

今でもこれは実現したいと思っていますけれども、もう1つ大学で農業を学んだ者としてやりたかったことが、農家が出稼ぎをしなくてもよくなるようにすることでした。以前は、夏は農業、冬は出稼ぎをすることが多くありました。これにはいろいろな不幸なこともあったのです。私の子

供の頃、友人のお父さんが出稼ぎから帰ってこなかったことがあったのです。さらにその後、その友人の家からお母さんもいなくなってしまったのです。その頃から、雪の深い秋田の県南地域の冬でもできる農業があればと思っていました。そしてもう一つ、湯沢市を、ガーデンシティの異名を持つクライストチャーチのような、花でいっぱいの町にしたいと思っていました。

#### ・安心安全で顔の見える野菜作り

そのように活動する中で目にした、地産地消が起こした奇跡を紹介します。

地産地消というのは、日本のJAが提唱した言葉です。JAはこの言葉をスローガンに様々な取り組みをしたのですが、実は韓国でも身土不二運動という同様の運動をしていました。

さて、本題です。これからお話するのは、神奈川県秦野にある農産物直売所での出来事です。小田原と厚木の間にある秦野ですが、そこに地場産のものを売るとても広い直売所があります。この直売所、2004年度に2億5000万円だった売上が、4年後の2008年度には4倍の10億円にまで増えたのです。年を追うごとに売上が2倍4倍と増えていったのです。さて、この2004年度に一体何があったのでしょうか。実はこの直売所の会長が2004年に私に変わりました。知り合いが秦野市に務めていた関係で、会長に就任したのですが、理由はそこではありません。この直売所の副会長を務めておられる、JAの専務理事の方にもこの売上増の理由を尋ねたのですが、生産農家の方とJAの努力の賜である、という答えが返ってきたのです。農産物の新鮮さ、安心さと顔の見える関係を築いたこと、そしてリーダーの口コミがその理由だということです。

この顔の見える関係を象徴する出来事をお話したいと思います。ここに農産物を出荷している農家のAさん、89歳になるのですが、毎朝野菜を並べに車でやってきます。開店時間が8:30なので、8:20ごろまでに陳列し、なんとAさん、陰で自分の野菜が手に取られるのを見守っているのです。店頭に並べた自分の野菜が、目の前で売れて行くのを見ると、「よっしゃ」と言って喜ばれて帰っていくのです。10年ほど前の話

になりますが、このAさんが畑で足を痛めてしまい、8:20の出荷時間に40分ほど遅れて直売場に到着しました。そこでAさんは自分の野菜売場に4~5人のお客さんがいるのを見ましたので、そこで野菜を並べようとしたら、そのうちの1人のご婦人がAさんの肩をぽんとたたいて、「あなたの野菜を待っていたのよ!」と言ったのです。Aさんはここ数十年、奥さんにも息子にも「待ってた」と言われたことがなかったそうで、感激してとっさに「ありがとう」と返したそうです。そして足の痛みも何のその、「おら、もっと頑張るだ!」と、嬉しそうにまた畑に向かって行ったのです。この他にも、同じようなエピソードがたくさんあるそうですが、こうして日本有数の直売所が秦野市に誕生したのです。

話は前後しますが、私たちが2004年に最初に考えたことは、まず何を売りにするかということです。JAの人と一緒に、安心、安全、ブランド化などの意見が出て、これを進めていこうということになりました。具体的に何をしたかというと、イメージ戦略を変える事をしました。丹沢の山々から流れてくる水、それを使って育った野菜というイメージをまず打ち出しました。そして丹沢の水、大地を流れる水、川のイメージ。その水を使って生活する秦野市民。その水によって育まれる秦野市民と動植物。このようなイメージからそれを象徴するマークを考えたのです。そしてこのマークをつけてもらう事をしたのですが、その条件として、生産者に安心な野菜栽培に関する誓約書を出してもらい、環境汚染問題の推進に取り組んでもらったのです。そして出荷する野菜、果実に農薬の使用などの履歴をつけてもらったのです。さらに定期的な残留農薬の検査もしてもらいました。これにより生産者が自信を持って栽培した野菜を直売所に出し、安全は農家サイドに、安心は消費者の心、自分自身で安心安全な野菜を作ろうということになりました。こうした取り組みにより、売上が伸びていったわけです。

この直売所には毎日長い列ができて、長い時間お待たせすることがありますが、誰一人怒る人はいません。新鮮さ、安全さを待っている人がこれだけたくさんいるということが秦野市のこの直売所のいいところだと私は思います。

#### ・園芸の力で現代の抱える問題を解決する

生活に身近な場所に、不法投棄があったらどうしましょう。人目につかない山の中などにゴミを捨てることを不法投棄と言いますが、ある山の中に、冷蔵庫や軽自動車などの大型のゴミも捨てられるようになってしまった場所がありました。そんな時に、「この場所に花を植えたら、どう変わるのでしょうか?」と言い出した学生がいました。それならば、卒業論文としてそのことを書いてはどうですか、と私は言いました。その学生は、実際に山の中のゴミの不法投棄のあった場所に花壇を作りました。すると4月に19kgを超えるゴミがあったのですが、5月~7月に捨てられたゴミはなんと0kgだったのです。8月は諸事情で手入れをできなかった時期があり、3kgほどのゴミが捨てられてしまいましたが、これは、現代の抱える問題を、園芸が解決できるのではないかと、いうことを示していると思っています。汚いところにはゴミを捨ててもいい感じがします。しかしその汚いところに花を植え、美しく飾ると誰もゴミを置かなくなるという現状があります。この日本人の感覚は素晴らしいと感じます。しかし手入れをできず草だらけになると、とたんにまたゴミが捨てられるということも同時に証明されました。

この研究をさらに深く掘り下げていくと、草花が町を変えたという事例に出会うことができます。相模湾の河川敷の芝桜ラインについての事例です。毎年4月~5月にこの場所には芝桜が咲き誇り、多くの方が見に来られます。しかし以前は、テレビやラジオ、イス、ゴミなどが不法に投棄される現場でした。そこで、「私達の町はこんなところではない、昔は遊ぶことができた。どうしてこうなってしまったんだろう。」と思った老人会の方が立ち上がり、まず市役所に出向いてゴミの片づけの相談に行ったのです。すると市役所では、「この河川敷は市役所のものではなく、県のもので。」と言われ、県に言ってほしいと言われてしまったのです。次に県に言ったところ、今度は「この場所をきれいにするための予算はありません。しかし、この場所を皆さん自身できれいになさって、その後この場所を自由に使うのはいかがですか?」と言われました。なので、老人会ではまずは子ども会、自治会などいろいろな人に

声をかけて、自分たちの手でやってみることにしたのです。結果、トラック十数台分のゴミを片付けることができたのです。そして河川敷の草を刈り、土を盛り、芝桜の苗を植えたのです。ゴミの不法投棄の現場が芝桜ラインという一大名所になったのです。

その後そこには小さなテントが1つ建ちました。これは、農産物の直売所でした。芝桜ラインが、経済的効果を生んだのです。そして農産物の加工品、ジャムや漬物も売るようになりました。このことにより農家の出荷するものに多様性が生まれました。さらにこの芝桜ラインを歩く人が、雑草を抜くようになりました。これは町の活性化につながっていきました。このように、この芝桜ラインを通じて、この地区は変わっていったそうです。

このようなところ、人の手が入った自然はやはり美しいと思います。自然ももちろん美しいですが、園芸もやはり美しいのです。しかし、人の手が入る美しさ、花や野菜の持つ美しさ、この維持のためには毎日の努力が必要となります。

#### ・野菜作りの持つ力

私たちの大学のことをお話したいと思います。新宿から60分ほどのところにある大学ですが、敷地内には畑があります。私は学生に、こんな質問を最初にします。「じゃがいも、さつまいも、さといも。このいもはどこにできるでしょうか？」じゃがいも、さつまいもなどは幼稚園や小学校などで作っている事が多いですので、よく知られています。ですが、さといもはどうでしょう。栽培した経験がないため、答えられないのです。これはさといもに限った話ではなく、きゅうりやトマト、カリフラワーなど、意外と普段食べているものがどうできるのか知らないのです。義務教育期間や高等学校での食べ物についての教育がもっと必要だと思います。

その大学での実習の中で、収穫をした野菜をその場で食べることがあるのですが、やはり格別に美味しいという声を聞くことができます。またある女子生徒からは「先生、この小さなきゅうりは、私たちが育てた最初の命と考えていいんですよね。」という言葉を見ました。このとき、非常にいい言葉を聞いたなと思いました。

そして、実習でできた野菜の一部は、生徒が新聞紙に包んで持って帰り、レポートを出してくるのです。今日は、「私は2ヶ月父と話をしていませんでした。」という書き出しで始まっていた1つのレポートをご紹介します。

「私が持ち帰り、新聞紙に包んで机の上に置いておいたきゅうりを、母が開いてみたところ、棘がすごく、“こんなに新鮮なきゅうり見たことがない”と母に言われました。そして大きなものは棒々鶏に、小さなものはサラダや漬物になりました。どれもやはりとても美味しくできました。そして父が帰ってきたのですが、一口そのきゅうりを食べて“お母さんこのきゅうりはどこで買ったんだ？こんなに美味しいきゅうりは食べたことがない”と言ったのです。そこで母は“このきゅうりはどこかで買えるものではなくて、〇〇ちゃんが自分の大学で作ったんですよ”と答えました。その後父は黙々とご飯を食べていたのですが、翌朝、起きてみると父からの手紙が枕元にあったのです。手紙を開いてみると、“きゅうりがとてもおいしかった。また持って帰ってきてほしい”という手紙と、3千円が入っていたのです。そこで私は意を決して食事をしている父のところへ行き、“お父さんごめんなさい。お父さんが臭いから、2か月話さなかったの”と正直に話しました。」

それ以来彼女のお父さんは、帰宅するとシャワーを浴びてきれいにしてから食卓に来るようになったそうです。もちろん親子の仲も元通りになったそうです。持ち帰った野菜が家族の会話を生んだのです。

他にも2008年には弁当委員というのを作り、食堂のような場所でお弁当を食べたり、おむすび大会をしたりという活動をしています。

#### ・野菜作りの社会的効果

家庭菜園の人気の上昇しているという話をしたいと思います。この背景をお話すると、まず2009年、団塊の世代が一挙に退職するということがありました。その方々が、一生懸命今まで働いてきたが、退職後にやることがないなと思ったのです。ちょうどそのころ、中国の餃子問題や残留農薬の問題などで食の安心安全への関心が高まっていました。そして、定年後は農業に、という



定年帰農の考えも出てきました。これと、寿命を延ばす、健康な生活のための家庭菜園ということがつながったということが背景にあります。また、食物を育てるという人間の原点を私たちはやるんだと。これはつまり、社会では必ずしも報われることがなかったが、野菜作りでは、苦勞、努力した分だけ報われる。そして、四季を感じ、食料を得ることの大切さを実感し、病気や害虫との闘いも経験し、コミュニケーションも生まれる。結果として体が健康になる、ボケも改善する、寿命も延びるということがあります。これは、家庭菜園で、自分で考え、植物を育てていくということの達成感が脳の活性化につながり、認知症の発生を抑える事ができると言われているからです。研究で出された数値的には、スポーツよりも効果的なのです。また、家庭菜園を行う際には、中腰で踏ん張る必要があります。これにより下半身の筋肉が鍛えられ、そのことで全身の血流が保たれるのです。動脈硬化の予防にもつながります。こうして、健康年齢という、ボケてもいない、健康で過ごすことのできる年齢を少しでも伸ばすことで、介護にかかる費用を抑えることができます。そして個人の生活の質の低下を防ぐこともできます。家庭菜園の広がりや、社会保障費用の負担軽減につながるのではないのでしょうか。そして耕作放棄地の削減にも貢献できます。

さらに野菜のうんちくをきっかけに会話量をアップさせることができます。うんちくですが、例えば、ジャガイモを植える際に、種芋を半分に切って灰をつける方、灰をつけずに乾燥させる方いらっしゃると思います。この2つのやり方、どちらも実は収穫量が変わりません。他にも、ジャガイモの花をとってしまう方もいらっしゃいます。これは、この作業により、より実に栄養が行きますので、たくさんの収穫を得ることができます。また、違う植物でも、同じ仲間、例えばスイカ（うり科）とメロン（うり科）などを連続して同じ場所に植えることを連作といい、避けなければならないということがあります。例えばキャベツの後に、アブラナ科のコカブを植えると、根こぶ病という病気になってしまいます。これもアブラナ科の連作障害です。その逆もあり、きゅうりを植えた後になすを植えると大きく育ちます。これを輪

作といいます。これは非常に重要です。意外なところで、野菜から薬が作られることがあります。有名なものと、キャベツから作られた薬にキャベジンがあります。また、玉にならないキャベツは、ケールといい青汁として親しまれています。

他にも、金色のきゅうりを作り出すこともできます。それには、カボチャの根っこできゅうりを作るという手法をとります。きゅうりは1日3cmずつ伸びていき1週間で20cmになります。1週間畑に見に行かないと、きゅうりが大きなヘチマのようになってしまいます。にがうり、ヘチマ、冬瓜、きゅうりといったうりの仲間はお肌を綺麗にしてくれます。ヘチマは、食べるのはもちろんですが、たわしとして活用したり、ヘチマ水を作ったりもしますし、かつてはきゅうりでお肌のパックをしたという女性もいらっしゃるのではないのでしょうか。きゅうりのうんちくを続けると、きゅうりは世界で一番栄養のない野菜と言われています。なすも似たようなものなのですが、なすは、アントシアニンという栄養素を持っています。このアントシアニンは目にとってもいいです。赤くなったトマトはリコピンとカロテンという2つの体にいい成分を持っています。トマトが赤くなると、医者が青くなるとも言います。ピーマンは赤いピーマンの方が甘く、緑のピーマンの方が苦いのです。ですが、緑でも苦みがないピーマンが最近出てきています。

最近の大根は98%が青首大根で、比較的スポットと抜くことができます。さて、三浦大根という大根があるのですが、とても大きくなる大根です。1つで3kg～5kgになることもあります。ある時の公開講座で、この大根の収穫体験に、70代の方が名乗りを上げたのです。結果3回もチャレンジをして、ようやく抜くことができました。また守口大根という世界で一番長い大根も日本にはあります。

地域の特色生かした野菜もあります。山形の食用菊“もってのほか”や、静岡の富士山の“水かけ菜”という野菜、そして川越のさつまいも“紅赤”は、栗よりうまいと言われています。また秋田には“じゅんさい”があります。そして東京は“うど”が生産数日本一です。横須賀辺りでは七草を作っています。横須賀の七草は、3ヶ月で2,000万の

売上、諸経費を引くと 700 万程度の収入があるそうです。

#### ・野菜作りを 1 つのプログラムとして考える

では、どうやって野菜で良いプログラムを作り上げるかということをお話したいと思います。キャンプと同じですが、野菜作りは比較的やや難しいものです。受講者に楽をさせる必要はない、できるだけ難しいこともやらせてみる。良いプログラムとは受講者達の様子を見ながら進めていくことで、最終的にプログラムが自然に良くなっていくことだと思います。例えば、大根は種を直接畑に撒かなければ、立派な大根にはなりません。そして発芽すると、間引きが必要になってきます。その頃の苗の大きさは、かいわれ大根と同じくらいです。そしてまっすぐな大根にするためには、土も大切です。きちんと耕して、ふかふかで柔らかい土にしなければなりません。他にも虫、アブラムシや病気への対応も必要です。そしてやっと収穫となりますが、収穫した大根も余すところなく漬物にしたり、切り干し大根にしたりする工夫が必要です。また、大根は淡色野菜ですが、ジアスターゼという栄養素を持っています。辛味成分も体に良いです。葉っぱは緑黄色野菜となり、ビタミンC、カリウム、カルシウム、カロテンがかなり豊富に含まれています。このように大根 1 つ育てることで、種から漬物まで全て教材とし、たくさんの面白さを見つけることができます。また、プログラムでは、アイスブレイクも大切で、私は良くギャグを使いますが、ただ経験したことを笑いに変えるだけでなく、心に響くようなものにしたいと思っています。

次世代へ目を向けることも大切です。例えば食事という視点から見ると、私自身、朝食を抜いてしまったり、飲みに行ってしまうと、食生活が乱れがちです。これでは良くないですね。また、よく昼食で食べる天ぷらそば、ここからは食料自給率の問題が見えてきます。かき揚げのエビは 95%以上、油やつゆやしょうゆに使われる大豆は 94%、小麦粉は 90%、そば粉は 90%以上が輸入です。実はそば粉は 20%ほど自給しているのですが、高価格なので、輸入物がよく利用されます。よく考えたら、きちんと自給できるの

は水だけとなってしまいます。これは問題ですね。付け加えると東南アジアから輸入するエビは、水田に海水を入れて養殖するので、マングローブを破壊してしまうという弊害も生み出しています。

#### ・植物を育てる意義

改めて、生産者の立場で植物を育てる意義を考えますと、まず、植物を生産することで、農業者としての自信をつけることができる点が挙げられます。自分の努力を惜しまない、自分の命をかけて行う気概を持たなければなりません。そうして儲けていく、お金を稼ぐ農業をしなければ自分たちも食べていくことが出来ません。自分の生産した植物で、お金を稼ぎ、家族を養う、これが自信につながるのです。さらに、自分の家、畑、田んぼといった環境を守ることも意義として挙げられます。

逆に、消費者が行う家庭菜園の意義を挙げると、四季を感じることで、自然との共生の感覚を養うことや、家族とのコミュニケーションの手段となるということが挙げられます。

ロシアにはダーチャという文化があります。畑付きの別荘のことをダーチャといいます。だいたい普段生活している場所から車で 1 時間程度の場所に、このようなダーチャが集まったダーチャの村があり、国民の 6 割がダーチャを所有しています。ロシアの人にとって大切な場所なのだと思います。1980 年代から 1990 年台前半にソ連がロシアに変わるということがありました。この頃の生活はとても厳しく、給料の遅配や未払いも多々あったそうです。それでもこのダーチャで採れた野菜のお陰で、餓死者がいなかったそうです。またこのダーチャを実際に訪ねた際、ダーチャ協会にも行ったのですが、そこには日本のホームセンターよりはるかにたくさんの種が保管されていて感動したのを覚えています。

#### ・さいごに

今日の講演のテーマでもありますが、「誰が人を育てているのか」ということですが、まずは、ここにいらっしゃる参加者のみなさまの後ろ姿ではないでしょうか。後ろ姿は地域の方をはじめたくさんの人に見られています。地域、そして日本

の未来の環境が美しく正しい方向へ進むためには、老若男女すべての人に植物を育てることを通じて、身を粉にして働くことの大切さと厳しさを体験的に学んでもらうことが大切だと思っています。また、野菜を作ることの楽しさや喜びをみなさんに味わっていただきたいとも思っています。大地を耕すことは人の心を耕すことなのです。

有名な桃太郎の続き話では、桃太郎が鬼退治をしてめでたしめでたしとなった後、宝物を手に入れた村人は働かなくなり、墮落してしまったそうです。そこで桃太郎は鬼に宝物を返しに行くことにしたそうです。ですが、そこで桃太郎が目にしたのは、クワや鋤を持って畑を耕す、鬼たちの姿でした。そして鬼たちは、桃太郎が返そうとした宝物を受け取ろうとしなかったのです。困った桃太郎は、宝物を捨てて諸国を回りました。そして帰ってきたふる里の村で再び桃太郎は、鬼たち同様クワや鋤をもって畑を耕す村人達を見たのです。しかも楽しそうに笑顔で。まさに大地を耕すことは、人の心を耕すことなのです。



# 特別寄稿



## 我が国における野外救急法の現状と課題

## The Trend and Issue of Wilderness Medicine in Japan

寺田達也（一般社団法人 Wilderness Medical Associates Japan）・  
 柏澄子（フリーランスライター）・佐藤初雄（NPO 法人国際自然大学校）・  
 溝手康文（溝手康文法律事務所）・  
 稲垣泰斗（北里大学病院救命救急・災害医療センター医師）・  
 岡村泰斗（株式会社 backcountry classroom）・  
 河波弘晃（NPO 法人 Japan Emergency Aid）・  
 稲垣尊仁（東京大学法科大学院）・  
 島崎晋亮（一般社団法人 Wilderness Education Association Japan）・  
 小清水哲郎（アウトドアコンサルタント）・  
 山本康之（健和会大手町病院救急科医師）

## 1. はじめに

野外プログラムのサービスにおいて、それがツアーリズム、エデュケーション、アスレチックの分野に限らず、リスクマネジメントは、当該業界が持続可能な継続と発展を続ける上で、欠くことのできない共通の要素である。近年の野外プログラムサービス事業の目覚ましい発展と、それに伴うリスクマネジメントのノウハウの各団体における専門分化を受け、2017年6月に、一般社団法人 Wilderness Medical Associate Japan: WMAJ、NPO 法人 Japan Emergency Aid: JAEA、株式会社 backcountry classroom が運営する Wilderness Medicine Training Center: WMTC、一般社団法人 Wilderness Education Association Japan: WEAJ、北里大学附属大学病院救命救急センター及び法律関係者が連携し、野外リスクマネジメントプロバイダーの情報発信と、各種野外プロバイダーの情報交換の場を目的として、Wilderness Risk Management Japan: WRMJ を設立した。本稿は、WRMJ の第 1 回カンファレンスシンポジウムに

おいて行われた、近年急速に国内で認知が進んでいる野外救急法について、野外教育プロバイダー、法律関係者、医療従事者の観点から、現状と課題を考察することを目的とする。

## 2. パネラープロフィール

柏：野外教育プロバイダーである佐藤初雄氏は、我が国の野外教育の先達であり、大学卒業後、アメリカに渡り、コロラド Outward Bound School: OBS で冒険教育のインストラクターを務めた。帰国後、国際自然大学校を設立し、現在はその理事長である。

弁護士である溝手康文氏は、ヒマラヤ、天上山脈、北極圏の山など国内外で豊富な登山経験がある。山岳事故における法的責任、野外活動におけるリスクマネジメントに書籍があり、国立登山研修所の専門研究員である。

医療従事者である稲垣泰斗氏は、北里大学救命医、災害医療センターで勤務する。自らも野外救急法を受講し、トレイルランニングレースに

において医療的サポートの体制づくりをしている。

### 3. 野外救急法小史

岡村：野外教育の歴史的文脈の中で、日本ではじめに野外救急法がオープンで行われたのは、OBSが始まりである。OBSは、大自然の中で行われる冒険活動を通じて青少年教育を行うことを使命としており、2007年にWilderness Medical Associate: WMAのWilderness First Responder: WFRコースを長野県小谷村にあるOBS長野校で開催した。国際組織であるOBSは、本部のリスクマネジメント検査を毎年受け、国際基準に基づいて運営されている。OBSのインストラクターにはWFRが必須であり、国際基準を満たす理由からWFRコースを導入した。

一方WEAJは、大自然の中で行われる教育活動を指導することのできる指導者養成機関である。OBSの青少年育成に対して、WEAは指導者養成とその課程認定が使命である。その指導者資格を維持するためにWFRが義務付けられている。WMTCは、国内のWEAメンバーの資格維持をサポートするために始まった。OBSもWEAJも、いずれも外発的な理由から始まった。

一方アメリカは、1940年代にイギリスで生まれたOBS活動が、1960年代にアメリカに伝わり、ウィルダネス教育が急激に成長した。その中で、野外指導者に必須なスキルとして、必然的に野外救急法の開発が進んだ。その後、医療を扱う専門性から、野外救急法を専門に提供する団体が生まれた。その後医学界にも認知され、1983年にWilderness Medical Societyが設立し、野外救急法の技術に医学的な検証が行われるようになった。その後、野外救急法プロバイダーの成長に伴い、2008年に北米の野外救急法プロバイダーが一同に介し、Scope of Practice: SOPに批准することで、野外救急資格に統一の基準が設けられた。

このように、アメリカでは、内発的なニーズによって、徐々にシステムが出来上がったのに対し、日本では、でき上がったものを、インストラクターをするため、もしくは指導者資格を維持するために、国内の内発的なニーズがないところに、外発的に持ってきたことにより、野外プロバイダーに十分な認知と理解が得られていない。野

外救急法の資格保有者が、正しい法的、医学的的理解と、安心してスキルを活用できる環境を整えるために、第1回のカンファレンスのテーマを「野外救急法」とした。

### 4. 野外救急法の現状

柏：野外救急法は、Wilderness First Aidの略だが、Wildernessという言葉が色々な取られ方をしている。辞書では「荒野」という意味があるが、この場合では救急車が到着できないところ、処置、搬送など、都市の医療システムが確立できないところを指している。野外救急法では、ウィルダネス状況下という言葉で表す時もある。例えば、我々が活動する、山岳、川、海なども含まれるし、都市部においても、災害時に救急車が通常システム通りに来なくなった場合も、ウィルダネス状況下と考えることができる。これからの話は、そういった状況での救急法である。このシンポジウムでは、それらに、現在どのような現状と課題があるのか、それぞれの専門家から解説してもらう。

佐藤：野外教育をプロフェッショナルとして、35年前に国際自然大学校を立ち上げた。現在はNPOとして、職員約70名、非常勤職員約30名、合計約100名を抱える団体を経営している。その傍ら、自然体験活動推進協議会、通称CONEを2000年に設立し、野外活動に関わる非営利団体や、通称自然学校と言われる民間団体が、指導者の問題を共通のテーマとして、ネットワークを作っている。ある調査によれば、そのような民間団体は3700と言われているが、実質的な感触は500ほどである。現在CONEには、ボーイスカウトのような大きな団体から、家族経営を行うような小さな個人事業まで、230団体が登録している。

さらに、CONEでは、対処療法としての応急処置から、事故を起こさないという予防の考えに発展し、リスクマネジメントの考え方が高まった。2014年から、リスクマネージャーという資格制度を立ち上げ、自然体験活動を行う団体、あるいは、指定管理で複数の施設を運営している場合には、その施設ごとに、リスクマネージャーという資格を義務付けている。資格制度は、入門のため



のリスクマネジメント講座 2.5 時間、現場のリスクマネジメントを行うリスクマネジメントディレクター 9 時間、組織、団体、施設のリスクを管理するリスクマネージャー 11 時間の 3 種類の資格を設けている。

実際に死亡事故も起きており、刑事責任を問われ有罪になった事例もある。単に処置をするだけよりも、どのように予防したか、どのような資格をもち、どのような勉強をした人が指導しているかが問われる。死亡事故が起こると警察が入り、安全管理マニュアルがあるのか、運行基準はあるのか、指導者はどのような資格を持っているのか、その資格を取るためにどのような勉強をしたのか問われる。このような背景から、包括的なリスクマネジメントの考え方を広めている。

このような中、野外救急法について、私自身、コロラドの山の中で 1 ヶ月間ほどインストラクターをしていたので、その重要性を理解しているが、「ウィルダネス」という言葉のインパクトが強いため、北海道の原野や、無人島をイメージしてしまう。先ほど説明があったように、救急車が通常通り来られないところ、都市部では 7-8 分でくるところを、山の中では、30 分、1 時間来ないところと考えると、自然体験活動の分野にも当てはまる。活動以外にも災害時に必要になることから、ウィルダネスという言葉よりも、救急車が 1 時間以上かかるところの処置と考えると、自然体験活動の指導者もより勉強する必要がある。職員には、Medical First Aid: MFA の救急法は取らせているが、さらに野外救急法のノウハウ、知識、技術が必要になると、今日改めて認識した。

柏：日本の法律の中で野外救急法を使って良いのか？ 高度な医療に似たような行為があるが、それらは医師法に抵触するのか？

溝手：医師法では、医師の資格がなければ、業としての医療行為はできない。つまり、医療行為を継続して行うためには医師の資格がいる。これに違反すると、刑事罰が科されるという厳しい法律である。ところが、医療行為の範囲は広く、血圧を測ることも、包帯を巻くことも医療行為であり、これらを全て医師法の適用範囲にすると世の中が

大変な事になる。現実には、厚生労働省が医師法の適用範囲を狭めてきている。例えば、AED は、一般人が扱えるよう緩和されてきている。

野外での救急活動について、反復継続する意思があることを医業というので、すなわち反復継続性がなければ、一般的には医業ではなく、医師法違反ではない。あまり深刻に考える必要がないのに、野外の現場で、それを気にする人が多い事に驚いている。

緊急事態で医療行為をすることは、刑法の緊急避難の規定に当たる。緊急時に他人の身体を守るために、やむを得ない行動を取ることを緊急避難といい、違法性はない。緊急避難に当たらない場合でも、反復継続して行うものでなければ、救急活動は医師法違反ではない。

医師法以外に、野外救急法について問題になるのは、万が一それがうまく行かない場合、処置にミスがある場合に、法的責任が発生するのではないかということであろう。これについては、仕事として野外活動に従事しているか、仕事ではないのかを区別する必要がある。仕事として野外活動を行う人、例えば、ガイド、インストラクター、学校教師など、また、もし仕事として関わるのであれば医師、看護師、救急隊員、警察、消防関係者などは、職務上の注意義務がある。これは当たり前のことで、あらゆる職種において、仕事として行なうのであれば、職務上の注意義務がある。職務上の注意義務の内容は、それぞれの職種によって異なる。さらに、それぞれの現場において、どのような注意義務を負うのか変わってくる。一般的にいうのは難しいが、それぞれの職種に応じた注意義務があり、その中に野外救急に関する注意義務もある。例えば、医師の場合は、仕事に患者の生命を守るために、医師としての基準に基づいて、一定の注意義務を負う。野外のガイドであれば、客の安全を守る注意義務があり、客が途中で危険に曝されたり、病気になったりした場合には、一定の応急処置を行う義務が生じる。

一方、職務とは無関係な場合、例えば友人と野外に出かけた場合や、山岳会の活動、ハイキングクラブの活動等は、基本的には職務ではないので、職務上の注意義務はない。問題になるのが、ボランティア活動で、基本的には職務上の注意義務は

ないが、きちんとした組織のボランティア団体が、子供達を引率する場合には、ボランティア団体としての一定の注意義務は生じる。最近では、ボランティア団体の活動について、民事責任、刑事責任を問う判例が出ている。職務上の注意義務、あるいはボランティア団体としての注意義務を負わない場合は、基本的には自己責任が原則であるが、最低限の注意義務が生じる。

野外での救急活動について言えば、事故に偶然遭遇した人が、善意で救急活動を行う場合には、法律上には事務管理に基づく注意義務がある。事務という言葉が分かりにくいですが、法律上、義務のないことをすることを事務管理という。これはそれほど重い注意義務ではない。例えば、川で溺れている人を、通りかかった人が見つけ、救助しようとする。これは事務管理に基づく救助活動である。ところが救助しようとした人が泳ぐことが苦手で、本来救助活動しなくても助かったはずの人が、救助したために溺れさせてしまった場合など、善意で救助活動する場合にも、最低限の注意義務はある。事務管理については、緊急時において、重大な過失がなければ、責任を負わない。これを緊急事務管理という。緊急事務管理は一般の人にほとんど知られておらず、弁護士などの法律家も、緊急事務管理を仕事で扱うことはほとんどない。緊急事態では、ボランティアで行なったことについて、重大な過失がなければ、責任を負わないことに日本の法律はなっている。この点アメリカやカナダでは、善きサマリア人法というのを作って、ボランティアで緊急時の救助活動に重大な過失がなければその責任を負わないといった法律がある。ボランティアで救助活動をするを高く評価するという考え方が根底にある。善きサマリア人というのは聖書に基づく話なので、ほとんどのアメリカ人は知っている。ところが日本の緊急事務管理というのはほとんど知られていない。法律家でも昔勉強したことがあるといった程度の認識の人もある。つまり、ボランティアによる、もしくは野外での救助活動に関する関心が日本では低い。それに対して、アメリカやカナダではそれらの活動をプラスに評価するために、善きサマリア人法が規定されている。日本でも、緊急事務管理の規定があるので、ボランティアの救助

活動において法的責任が生じることはほとんどない。ただし、職務上の注意義務がある場合には、緊急事務管理は適応外である。アメリカでも職務上の注意義務を負う場合には善きサマリア人法は適用されない。職務として行なっているので、職務として一定の義務を満したかを問われるのは当たり前のことであって、ボランティアとして行う救助活動とは区別される。

柏：職務上の注意義務を負うガイドやインストラクターにおいて、過失を問われる明確な基準はあるのか？

溝手：そもそも、野外活動において、裁判例がほとんどないので、裁判所の基準がはっきりしない。職務上の注意義務が問われるはずだと誰もが考えるおかしな行為を考えればよい。例えば、学校の教師が生徒を連れて野外活動を行なった場合、明らかに教師のミスによって事故が起きた場合や、山岳ガイドが、ツアー客が倒れたのに何もせずに放置して亡くなってしまった場合は、明らかに注意義務違反を問われる。つまり、誰が考えても明らかにおかしいようなケースで責任を負う。それ以外に、教師、山岳ガイドが本来すべきことをしていれば法的責任は生じない。

柏：医師の立場で、一般向けと、医療従事者向けの野外救急法の講習を2つ受け、その内容について感じたことは？

稲垣：野外救急を受けたきっかけは、もともと野外が好きで、登山やトレイルランニングをやっていて、かつ救急救命医であることに加え、大学生に90分の応急処置の講義を担当することとなり、どうしているのか知るために受講した。医療従事者向けのコースでは、授業に間に合わなかったため、まず、一般向けのコースを受けることになった。受講の目的は、90分の授業で話す、必殺技を習いに行くつもりだった。野外救急法を受ける一般の人も、おそらくすぐに使える必殺技を習いにいくのではなかろうか。ところが、そこでは、きちんと病態生理を教えていた。医療現場で行なっている、命を守るような根幹をどう

やって評価するかということ、医療従事者でない人に教えていた。さらに、40時間やると受講者は評価と処置ができるようになり、非医療従事者でも、そういうことができようになることに驚いた。一般の人は、野外救急法は必殺技だと思っているが、そうではないことを知るために学びに行く必要はある。さらに、野外救急法を行うことが、医学的にも間違っていないし、安全を高めることに確実になることを理解すべきである。

柏：医療従事者向けのコースではすでに50人以上が受講しているが、医療従事者が野外救急法を学ぶ意義はあるのか？

稲垣：医療従事者には、医師、看護師、救急救命士等があり、特に医師、看護師は病院の中の世界である。機材が整っているところで、運ばれてきた患者に対応するのが一般的な考え方であり、普段はそのような業務を行なっている。私は、救急救命医なので、普段から救命に関わることをやっており、様々な外傷や重症疾患の全身評価には慣れているが、昨今医療の現状は細分化されており、すべての医師が日常的に包括的な評価に長けていない場合もある。そういった医師が、基本的な病態生理の概念を理解し、包括的に評価することに意味がある。さらに、普段は病院内なので、病院外であるということを考えるよききっかけになる。武器（医療器具）を持っていくのに越したことはないが、病院を担いで持っていくわけにはいかないの、最終的な武器は頭であることを学ぶことができる。そういった意識づけや、病院医療、都市救急が及ばない状況での救急法が必要であることに気づくため十分に意味がある。

溝手：野外での救急法と、街中での救急法の違いについて、職務上の注意義務を負う人にとって、街中の場合は、問題になることはない。例えば観光ガイドが、客に急病人が出た場合は、救急通報して救急車を呼べば、職務上の注意義務を果たしたことになる。そうすば、街中では救急法の知識がなくとも、問題にならない。一方、すぐに医療の専門家の救助を求められないような野外で、街中と同じように、ガイドが何もせずに救助を求め

に走っていき、1時間も2時間もかかるような場所では手遅れになることがある。そこで、ガイドは何かすべきではなかったのかということ、この野外救急法が問題となる。客の命を守るためには、最低限の救急法の知識がいる。ガイドが処置してミスがあった時の法的責任への不安があるため、躊躇しているのが現在の状況である。その時に野外救急法について、きちんと学んでいけば、自信をもってできる。万が一失敗しても、やるべきことをやっていたら法的責任を問われることはない。

## 5. 野外救急法の今後の課題

柏：野外救急法について医学的に内容に妥当性があり、法的にも重大な過失がない限り法的責任を問われることはないということだが、野外救急法が日本に入って10年経ち、必要であると考えた人が多いにもかかわらず、広まっていない現状について、今後どのような課題があるか？

佐藤：野外救急法の考え方が、「ウィルダネス」という言葉に影響を受け、荒野というイメージがあるが、そうではないことに野外教育に従事している民間が理解を深める必要がある。野外救急法の必要性を理解して、意識を高めていくことも必要である。私たちの組織の中にも、野外救急法の取得をしたものもいるが、全員ではない。これから私たちにも野外救急法を広めていく必要があることを、私も認識を新たにしました。

もう一つは、時間について、職員が本業に追われている中で、どのように時間を確保していくのが課題である。例えば、3泊4日ではなく1泊2日などの短縮コースのようなものがないか今後検討してほしい。

さらに、資格を取得するためのコストについても考えなければならない。野外教育がボランティア中心で進められている現状がある中で、若い人が専業として食べていこうとする時に、コストがハードルとなり、専業とすることをためらう懸念がある。

法律について、自然学校が子供キャンプを行う時に、コンプライアンスが問われる。業として野外教育を行う場合、子供達を募集するにあたって

は旅行業が必要になる。現場でマイクロバスやバンで子供を運ぶ場合は、運送法に関わる。古民家を借りて宿泊する場合には、旅館業法に関わり、その建物については消防法をクリアしていることが問題になる。食事を提供すれば、食品衛生管理法に関わってくる。私たちの行為全てが、さまざまな法に制限され、これまでグレーゾーンで行ってきた実態があり、今後法的なことをクリアしなければならないという課題がある。

この課題をクリアするために、2002年に超党派の議員連盟で、自然体験活動推進法(仮称)を進めてきたが、4年前まで現実味を帯びてきたが、政権交代で中断されている。現在は新たに、農林水産省、経済産業省、文部科学省と連携し、青少年と農山村漁村への滞在型の自然体験活動推進法の提出の準備をしている。

野外教育は、ボランティア団体から、専門の団体になるかならないかの段階である。残念ながら、まだ自然学校業界として、認められるには至っていない。これまで多くの関連省庁との連携はあったが、経産省との関わりはない。つまりこの分野は産業として認められていない。この分野を所轄する省庁がないため、今後この分野をどのように発展させていくかという行政的な問題とも関連している。いろいろな課題があるが、野外救急法のような、人の命に関わる安全の問題は、それらの中でも最初にクリアしておかなければならない問題である。ここでつまずくと、その後全て上手くいなくなる。まず初めに安全のところをしっかりとやっていかなければならない。

溝手：コストについて、優れたことや、やったほうが良いことをやろうとすると、必ずコストがかかる。これを個人の善意だけでやるには限界があるので、それをきちんとできるためのシステムが必要になる。そのために、行政に関わることも必要である。ただし、行政だけで全てできるものではない。例えば、スイスの山岳救助隊は、山岳で病気や怪我人が出ると、すぐにヘリが来る。これは国の補助金を一切使わずに、民間の寄付金と保険制度を利用してヘリを運用している。これもそういったシステムがあるからできることである。日本では、そこがまだ不十分で、野外救急法にお

けるシステムをどうやって作っていくかが課題である。システムを作るには、コストの問題や、人材の問題がある。今日のような会議や、情報交換を通じて、そういったシステムを作っていくことにつながることを期待する。

さらに、野外救急法に限らず、野外活動全般において、日本の法律を含めたシステムが不十分である。従来、法律も行政も無関心な分野であり、そういった隙間で、一部の人がボランティアとして行っていたことが、徐々に広まってきた。そういった、野外救急法、野外活動を含めた制度づくりをどのようにしていくかが課題である。アメリカやヨーロッパではアウトドア活動が盛んなため、国民の内発的な要求として制度が整備されてきた。一方日本は、どちらかというと仕事中心社会であり、仕事以外のことは、行政も、法律もあまり関心を持ってこなかった。日本でもアウトドア活動に対する国民の関心が高まっているので、そういった制度づくりを今後していかないといけない。今日の会議がそれに役立つことを期待する。

稲垣：野外救急という分野は、日本の医療の世界で認知されていない。入ってきて10年は経ったが、医療の世界では一般的には全く目が向けられていない。そのため、症例を集めて、医学的な検証をしていく必要がある。

野外救急法は、民間のレベルでは必要が増して広がってきている。医学の技術は、トップダウンが多いが、この分野においては、国民の関心や、ムーブメントが、医学の分野を動かすようになったら良い。

野外救急法という言い方をしてしまうと、特殊な世界であると考えられるが、病院前救急のさらに前、救急システムが及ばないところでどうするか考えていくと、救急医療の世界でも、一つの分野として今後発展していく可能性がある。その取り掛かりの時期にきているし、この会議もそのような意味で注目している。

課題が多くあり、システムになるには長い時間がかかるかもしれないが、通常の救急システムが及ばないところで、この分野が必要なことは明白である。時間をかけて症例を蓄積していくことが重要である。

柏：日本山岳ガイド協会では事故が起こると、専門の委員会で検証が行われ、気象の問題、ルートを選定、ガイドの判断など、なぜ事故が起きたか、リスクマネジメントについて検証が行われているが、そこで何らかの応急処置が行われたとしても、その症例を蓄積したという話を聞いたことがない。

稲垣：システムという話となると大きく、難しい話になるが、一つ一つの行為が医師法に抵触しないし、法的には緊急避難ということになるが、何をやっても良いというわけではない。医学的にそれを検証しなければ、野外救急法が正しいとは言えないし、正しい方向での野外救急が発展していかない。これまで登山事故の検証に医学的な視点が入ってこなかったと思われるが、今後そういった視点を持った、医師、医療関係者が増えていくことが望ましい。

#### 6. 野外救急法の法的、医学的妥当性

質問者（救急救命教育団体）：医師とは異なり野外救急法の数時間の講習しか受けていない一般人が医療行為を行うことに法的な妥当性があるのか？医師からみて野外救急法の講習に一般人が行うことで危険な医療行為はないのか？

溝手：一般的に他人に針をさしたりすると、傷害罪に当たる。野外救急で、傷害罪として問われるかどうかは、緊急避難に当たる場合は違法性がない。刑法で緊急避難の要件が限られているので、全ての場合で緊急避難に当たるかどうかは、事後的に判断しなければならない。例えば、脱臼の整復も、やり方によっては傷害罪になるが、一般的には社会的相当性があれば違法性がない。あるいは緊急避難に当たる場合もある。あるいは正当業務行為にあたる場合にも違法性がない。これらは個々のケースごとに事後的に判断する。では、どこまでできるのかという問題について、全く素人で、全くの経験がない人が行うのは問題がある。野外救急法を受講して、ある一定の知識があり、一定の条件のもとで、それなりの理由があれば、違法性がない場合が多い。そういった意味でも、野外救急法について学んでおいた方が緊急時の対

処はしやすい。

稲垣：野外救急法で教えているのは、救急車の来るような状況で脱臼の整復をしろといっているのではない。ウィルダネス状況下で、それがせざるを得ない状況と判断した場合に、一定のトレーニングを受けて知識と技術あれば行うことができる。そのトレーニングの基準をどこにするかというのは今後議論の必要がある。

質問者（救急救命教育団体）：米国の民間資格を、日本で一般人に対して行なって、それが十分な訓練となっていたか？

稲垣：それはなっていた。例えば、医師であっても脱臼の整復の経験が多い医者は限られる。一般の医師と比べても遜色はない。もちろんやられた行為に対して、今後検証の必要はあるが、正しい評価がなされた上で、整復を行わざるを得ない状況であれば、今後推奨されていく必要はある。

#### 7. まとめ

本稿は、第1回WRMJカンファレンスシンポジウムにおいてテーマとなった我が国の野外救急法の現状と課題について、野外教育プロバイダー、法律関係者、医療従事者から、以下の点の考察を受けた。

- 1) 野外教育の現場では、現在包括的なリスクマネジメントに注力している。野外救急法について、通常の都市救急が及ばないところや、災害時の応急処置と考えると、野外教育の分野も当てはまり、導入を検討する時期にきている。一方で、ウィルダネスという言葉の認識や、コースの時間数と参加費の低減などが、今後民間として導入する上で課題となる。
- 2) 野外プロバイダーにおいて、医療行為は反復継続性がないため、医師法には当たらない。野外での医療行為について、違法性があるかは、緊急避難、緊急事務管理、正当業務の観点から事後的に判断せざるを得ない。その上でも野外救急法を知っておいた方が、緊急時に適切な対応ができる。今後野外救急法が発展するためには、行政、法律が関心をもち、

システムを構築する必要がある。

- 3) 非医療従事者がこのような救急法を学び知識とスキルを身につけていることに驚いた。医療従事者にとっても野外救急法は、包括的な評価や救急システムが及ばないところでの医療を考える上で価値がある。現在野外救急法は医療の分野ではほとんど認知されていないが、病院前医療のさらに前の医療と考えると今後、救急医療の分野でも一つの分野として考えていく必要がある。そのために、症例の検証と蓄積のシステムづくりが必要になる。

# 資料





## 公益社団法人 日本キャンプ協会「キャンプ研究」投稿規程

### 【投稿資格】

1. 投稿の執筆者は、筆頭および共同ともに、公益社団法人日本キャンプ協会（以下、「本会」という）の会員に限る。ただし、本会が執筆を依頼する場合は、この限りではない。

### 【投稿原稿】

2. 投稿原稿の条件は、以下の通りとする。
  - (1) 投稿原稿の内容は、キャンプや野外活動あるいは自然体験活動等を対象としたものであること。
  - (2) 投稿原稿は、原則として未発表ものに限る。ただし、以下のものについては、初出を明記することで未発表のものとする。
    - 1) 各種学会等において発表要旨集等に掲載されたもの。
    - 2) シンポジウム、研究集会、講演会等で資料等として発表されたもの。
    - 3) 国、自治体、業界、団体等からの委託による調査研究報告書等に収録されたもの。
    - 4) その他、本会が特に認めたもの。

### 【投稿原稿の区分】

3. 本誌の投稿原稿の区分は、研究論文、実践報告とする。
  - (1) 研究論文は、論文としての内容と体裁を整えており、キャンプや野外活動あるいは自然体験活動等において新たな知見をもたらすもの。
  - (2) 実践報告は、実際に行われたキャンプ等に関する報告であり、目的・対象・プログラム・指導体制等の概要を示し、新たな取り組みや課題等が十分に整理され、今後のキャンプにおいて有益な示唆を与えるもの。

### 【執筆要項】

4. 執筆に関する細則については、以下の通りとする。
  - (1) 体裁は、A4 版タテ用紙を使用し、必ずワードプロセッサ等で作成する。
  - (2) 原稿の長さは、本文・図表・写真・引用文献を含めて、研究論文は 12 頁以内（1 頁 1,600 字以内）、実践報告は 8 頁以内を原則とする。
  - (3) 文体は、「である」調とし、文字は、現代仮名遣いを基本とする。句読点は、「、」および「。」を用いる。
  - (4) 氏名と所属は、和文および英文の双方を明記する。表題は、原稿の内容を端的に示すもので、和文および英文の双方を明記する。
  - (5) 要旨（200 語以上 300 語以内）とキーワード（5 語以内）は、研究論文のみ、英文の記載をする。
  - (6) 引用文献は、本文最後に著者名のアルファベット順で一括して、一連番号をつけて記載する。本文の引用箇所には、該当する文献番号を肩字「例<sup>1)</sup>」で示す。以下に、引用文献の記載例を示す。

#### (記載例)

雑誌の場合：著者名（発表年）題目、雑誌名、発行所、巻（号）、所在ページ

野村一郎（2010）キャンプの教育的効果、キャンプ研究、日本キャンプ協会、3(2)、101-112

書籍（単著）の場合：著者名（出版年）書名、発行所、所在ページ

野村次郎（2010）キャンプ教育、キャンプ教育研究社、30-40

書籍（共著等）の場合：著者名（出版年）章の題目、編者名、書名、発行所、所在ページ

野村三郎（2010）野外生活技術、野村一郎（編）、キャンプ総論、キャンプ教育研究社、25-28

### 【投稿原稿の採否】

5. 投稿原稿は、以下の掲載の採択を受けるものとする。

- (1) 研究論文の掲載の採択は、本会が委嘱する査読者 2 名が行う。審査の手続きは、以下の通りである。
  - 1) 研究論文の体裁に関して、本会が確認を行う。必要に応じて投稿者に修正を求める。
  - 2) 各査読者による審査結果は、次の 4 つのいずれかで報告され、投稿者あてに意見が付される。
    - A: そのまま掲載可能
    - B: 一部修正すれば掲載可能
    - C: 大幅に修正可能ならば掲載可能
    - D: 掲載不可
  - 3) 2 名の査読者の審査結果が、共に「D」の場合は、掲載不可とする。
  - 4) 上記 3) に当てはまらない場合のみ、2 名の査読者の審査結果が、「A」の段階に至るまで、投稿者とやりとりを行う。ただし、査読者が相応と考える修正や補足等が、同一箇所につき 3 回までに満たされなかった場合は不採択とする。
- (2) 実践報告の査読審査は行わない。ただし、不適切な表現や内容がある場合は、当該委員会が適宜助言し、投稿者が加筆修正を行った上で、掲載可能とする。
- (3) 修正を要する研究論文や実践報告は、60 日以内に再提出することとし、それを越える場合は取り下げたものとみなす。

### 【原稿の権利】

6. 本誌に掲載された研究論文や実践報告の著作権（「複製権」、「公衆通信権」、「翻訳権、翻案権」および「二次的著作物の利用権」を含む）は、本会に帰属するものとする。ただし、内容に関する責任は、当該研究論文や実践報告の著者が負うものとする。

### 【投稿方法】

7. 投稿に関する細則は、以下の通りとする。

- (1) 別紙の「キャンプ研究投稿連絡票」に必要事項を記入し、投稿原稿の計 3 部（オリジナル 1 部、コピー 2 部）と合わせて提出する。また、投稿原稿の電子ファイル（テキスト形式：各種メディア、電子メール等）も提出する。尚、投稿された原稿は、掲載の採否に関わらず、原則として返却しない。
- (2) 掲載料は、研究論文および実践報告ともに 5,000 円とする。

投稿原稿の送付先・問い合わせ先

〒151-0052

東京都渋谷区代々木神園町 3-1 国立オリンピック記念青少年総合センター内  
公益社団法人日本キャンプ協会「キャンプ研究」編集事務局

電話 03-3469-0217 ファックス 03-3469-0504

E-mail ncaj@camping.or.jp

掲載料の振込口座

郵便振替口座 00190-3-34031

加入者名 公益社団法人日本キャンプ協会

\*通信欄に「キャンプ研究掲載料等」と記載すること



## 資料◆「キャンプ研究」収録題目一覧

## ■第1巻(1997/12/20)

[原著論文] ●障害児における感覚統合野外キャンプ ●障害者野外活動におけるアダプテーションに関する一考察 ●青少年の組織キャンプ運営に対するキャンプカウンセラーの貢献度 ●キャンプにおける食中毒の法的責任と注意義務  
[実践報告] ●野外体験学習指導者養成コース事例報告 ●小学生を対象としたアドベンチャーカヌーツアーの実践報告  
●大阪府茨木市におけるリーダー育成キャンプの事例 ●アサヒキャンプ朽木村を中心とした徒歩移動型キャンプの実践報告 ●不登校の子ども達の暑い夏 ●自然体験活動の普及に関する新たな取り組み

## ■第2巻(1998/7/20)

[特別寄稿] ●全日本学生キャンプの草創  
[原著論文] ●キャンプ運営における行政主催からボランティアクラブ主催への移行に関する問題点 ●グループを理解する  
[実践報告] ●体験は未来を拓く力 ●トーチトワリング

## ■第3巻第1号(1999/6/30)

[原著論文] ●障害児における雪上での感覚統合トレーニングキャンプ ●知的障害者のキャンプ ●2002年からの新学習指導要領にみる教科教育“水辺活動”実施に向けての研究 ●火の技術に関する一考察 ●喘息児キャンプにおける呼吸ゲームの実践

## ■第3巻第2号(1999/12/25)

[原著論文] ●子ども長期自然体験村と参加体験型学習システム ●思春期女子キャンパーの理解と援助  
[実践報告] ●降雨が学生キャンパーの気分にあげざり影響について ●障害児における氷上での感覚統合トレーニングキャンプ ●知的障害者におけるキャンプファイアーの検討 ●馬のいる生活を体験する「ウマキャンプ」 ●雑木林を学ぶの場に ●丹沢山中移動型キャンプ「かもしかキャンプ'99」の実践報告

## ■第4巻第1号(2000/7/26)

[実践報告] ●'99無人島キャンプ in 具志島 ●ファミリーキャンプにおける冒険教育の実践 ●無人島体験記 ●デイケアセンターぼちぼちハウスリフレッシュキャンプ ●彩光キャンプ'99 ●体育系学生の軽登山における水分摂取の効果 ●キャンプ対象の拡大～幼児キャンプの実践～ ●フィットネスキャンプを終えて ●痴呆性老人と自然を共有した「シニアキャンプ高知」の実践報告

## ■第4巻第2号(2001/2/28)

[実践報告] ●筑後川リバーサイドキャンプ in 原鶴 ●山田キャンプフェスティバル2000 ●知的障害を持つ子供たちとの長期キャンプ ●「不登校児」自然生活体験キャンプ in いけだ  
[原著論文] ●「環境教育の学び」の評価方法に関する文献研究

## ■第5巻第1号(2001/6/30)

[実践報告] ●家族での乗馬体験プログラム ●幼児を対象にした野外教育の実践 ●人間関係形成の場としてのキャンプ～「未来世代 やさしさ発見!びわこキャンプ」の実践から～ ●第1回にいがた痴呆性老人キャンプ in 長岡 ●ニコニコキャンプ ●丹波自然塾-新しいコンセプトを持ったシルバーキャンプのこころみ-  
[研究資料] ●野外活動における冒険プログラムの役割について

## ■第5巻第2号(2002/1/31)

[実践報告] ●アドベンチャー in 阿蘇キャンプ実践報告 ●森林環境に働きかけるキャンプ ●大沢野町アドベンチャーキャンプ ●不登校キャンプの実践報告 ●野外教育事業所ワンバク大学の幼児キャンプ ●“共有”活動としての幼児キャンプ ●知的障害児のための教育キャンプ ●埼玉 YMCA LD 児等キャンプ～つばさグループキャンプ～  
[研究資料] ●キャンプ用環境家計簿の提案とその効果

## ■第6巻第1号(2002/11/11)

[実践報告] ●体験活動における遊び非行型不登校中学生への援助 ●ウマキャンプ-馬とのかかわりを通じた教育的アプローチの検討- ●人と人つなごう 手と手 心と心「つくしの家キャンプ in 鈴鹿峠自然の家」の実践から ●「からだほぐし」を通してのひとのかかわり 第1回 ハッピーウィリムン～ウィリアムズ音楽キャンプ～ ●母親と乳幼児のためのキャンププログラム ●エコキャンプ in 鷲敷キャンプ場 川内学童クラブ 鷲敷キャンプ場での試み

## ■第6巻第2号(2003/3/20)

[実践報告] ●海の自然体験活動としてのカヌープログラムの開発-港の中(閉鎖水域)におけるプログラムの一試み- ●カッパ体験キャンプ ●ユニバーサルキャンプ  
[研究資料] ●海洋性キャンプ参加者の海浜活動体験とプログラム満足度

## ■第7巻第1号(2003/9/30)

[実践報告] ●痴呆性老人のキャンプ体験における自己表現に及ぼす効用 ●親子いきいきリフレッシュキャンプ―事業中止から学ぶこと― ●登山プログラムにおけるスタッフのはたらきかけ―「大沢野町アドベンチャーキャンプ」の実践から―

[研究資料] ●キャンプ場のユニバーサルデザインについて ●キャンプ用環境家計簿の開発と効果

## ■第7巻第2号(2004/1/30)

[実践報告] ●阿蘇五岳制覇チャレンジキャンプ実践報告 ●海の体験活動としてのヨットプログラムの開発―湾内(閉鎖水域)におけるプログラムの一試み― ●子どもと共に創るキャンプ(Ⅰ)―白川小学校・神辺小学校・三重大学による3校合同キャンプの実践から― ●子どもと共に創るキャンプ(Ⅱ)―白川小学校・三重大学による合同キャンプ in 石水溪の実践から―

[研究資料] ●長期キャンプが参加者に及ぼす効果とその維持期間―わんぱくこども宿(10泊11日)に着目して― ●キャンプ環境報告書の提案 ●海辺を活用した総合的学習における海のイメージの変容に関する研究―国立室戸少年自然の家主催事業「日本版 School Water Wise」に着目して― ●キャンプ実習における状態不安に関する研究―係の役割に着目して―

## ■第8巻第1号(2004/9/30)

[実践報告] ●シニアと子どもの交流キャンプ ●楽しく、安全な登山をめざした中高年のキャンプ講座 ●第5回痴呆性高齢者キャンプ in ぐんま

[研究資料] ●自然体験活動を志す動機について ●アメリカにおける野外教育指導者養成カリキュラム― Wilderness Education Association を事例として―

## ■第8巻第2号(2005/1/30)

[実践報告] ●野外活動チャレンジ村アドベンチャーキャンプ実践報告 ●キャンプ経験が育成世代のサッカー選手の off the pitch 行動に及ぼす影響

[原著論文] ●長期キャンプ参加者の日常生活が自主性の変容に及ぼす影響

## ■第9巻第1号(2005/9/30)

[実践報告] ●おひさまクラブ親子キャンプ実施報告 ●子どもと共に創るキャンプ(Ⅲ)―白川小学校・三重大学合同キャンプの実践から― ●自閉症協会東京都支部おやじの会ファミリーキャンプ ●中高年スキーツアーと自然観察ツアー ●緑と林と防災の教室

[研究資料] ●キャンプリーダーのキャンプ用環境家計簿に対する意識調査報告 ●冒険キャンプのふりかえり場面における参加者の心理状態がキャンプ効果に及ぼす影響

## ■第9巻第2号(2006/1/30)

[実践報告] ●岡山 YMCA ファミリーキャンプの実践報告～信頼の上に成立するスモールコミュニティの拡充をめざして～ ●ポーン太の森自然冒険塾「今、求められる新しい自然体験のスタイル」

## ■第10巻第1号(2006/5/20) Camp Meeting in Japan 2006―第10回日本キャンプ会議 特集号

[口頭発表] ●キャンプにおけるカウンセラーレポートの意義―小笠原自然ふれあい学校をふりかえって ●おさお冒険クラブの取り組みとキャンプの報告 ●くろがね倶楽部キャンプ―野外活動を通してのコミュニティ ●ポーン太の森自然冒険塾 ●日本型キャンプを探る(1) ●指定管理者導入に伴う野外施設運営のあり方について ●指導補助員からみた自然学校の実態 ●リスクマップからみた安全意識の評価方法の検討 ●郷土を知る自然体験活動の事例報告 ●幼児キャンプ体験がその後に及ぼす影響 ●自然体験がひとりっ子の成長に与える成果 ●カウンセリング・キャンプにおける計画・実施のあり方における一考察 ●ふりかえり活動を導入した ASE が参加者の学習効果に及ぼす影響 ●冒険キャンプにおけるふりかえり活動が参加者の学習効果に及ぼす影響 ●シニア長期滞在型キャンプ「ふおーゆー白馬」 ●高齢者キャンプにおけるボランティアスタッフの期待と満足度 ●ユニバーサルキャンプ in むろと実践報告 ●看護学校における保健体育の授業展開 ●必修キャンプ実習が参加学生の気分面に及ぼす影響 ●授業として行う大学生のための海外アウトドア体験プログラム

[映像発表] ●教育キャンプ再考 ●キープ森のようちえん実践報告

[ポスター発表] ●リスクに対する感覚を磨く指導者トレーニング ●福祉士養成教育における予備実習としてのキャンプ実習 ●野生の森ゆめキャンプ報告―4年間の実践と研究 ●野外活動へのコミットメントを想定する要因について

## ■第10巻第2号(2006/9/30)

[実践報告] ●郷土を知る野外活動の実践報告―チャレンジ2702 ☆事業の試みから― ●ユニバーサルキャンプ2005 in むろと

[研究資料] ●「子どもと共に創るキャンプ」における学生の学び ●野外教育の実践・研究において答の出ていない問題

■第 10 巻第 3 号 (2007/3/30)

[実践報告] ●聴覚障害大学生を対象にしたキャンプ実習に関する事例報告 ●我が国初の WEA 野外教育指導者養成コースの実践報告 ●Coalition for Education in the Outdoors Eighth Biennial Research Symposium 参加報告

■第 11 巻第 1 号 (2007/5/19) Camp Meeting in Japan 2007 -第 11 回日本キャンプ会議特集号

[口頭発表] ●2007 年は日本の組織キャンプ 100 周年か? ●日本の野外活動に対する中国天津市の大学生の理解程度と興味 ●アフリカ熱帯雨林に住む狩猟採集民のキャンプ生活 ●最近 5 年間における野外教育研究の傾向 ●2007 ACA National Conference 参加報告 ●日本キャンプ協会国際交流委員会の働き-AOCF 創立- ●“WILDERNESS FIRST RESPONDER” 野外救急法資格取得コース ●組織キャンプ体験が子どもとその保護者へ及ぼす影響について ●看護専門学校での授業として行うキャンプにおける学生の学び ●デイ・キャンプで社会的スキルをより高めるには ●クラフト活動が参加者のふりかえり体験に及ぼす効果 ●学校教育における宿泊型自然体験活動の取り組みについて ●大学野外活動のプログラムの質向上に寄与するキャンプ道具の使用について ●ユニバーサルキャンプ 2006 実施報告

[ポスター発表] ●少年期の組織キャンプにおける Significant Life Experiences が成人後の環境行動に及ぼす影響 ●組織キャンプの魅力に関する研究~花山キャンプを事例として~ ●中学校における教科と自然体験活動の関連について ●キャンプカウンセラーの成長に関する研究 ●キャンプインストラクター養成カリキュラムの指導実習における受講者の心理的变化と自己評価 ●サンフレッチェ広島ジュニアチームキャンプ~10 年の軌跡~

■第 11 巻第 2 号 (2007/9/30)

[実践報告] ●あさお冒険クラブの仲間つくりとエコ・キャンプをめざして-野外活動を通して気づくこと-

[研究資料] ●キャンプ活動が睡眠に及ぼす影響 ●障害者キャンプにおけるバリアの研究-身体障害者模擬患者を通して- ●キャンプ実習における参加者の期待度・満足度に関する研究

■第 11 巻第 3 号 (2008/1/30)

[特集] ●不揃いの麦から作るビールの味には深みがある

[実践報告] ●キャンプ参加者が自己実現をはかるためのスタッフの支援について-白山市アドベンチャーキャンプの実践から-

[研究資料] ●クラフト活動が参加者のふりかえり体験に及ぼす効果 ●外国人チューターとのキャンプ経験がキャンプ参加者の意識や行動に与える影響

[報告] ●第 11 回日本キャンプ会議全体報告~みんなでつくるあしたのキャンプ (キャンプ場編) ~

■第 12 巻第 1 号 (2008/5/24) Camp Meeting in Japan 2008 -第 12 回日本キャンプ会議特集号

[口頭発表] ●指定管理者団体における野外活動事業の参加者状況 ●民間野外教育活動団体におけるサービスマネジメントに関する将来予測研究 ●キャンプ参加費に関する保護者の意識 ●米国サマーキャンプの日課活動 (実修) について-メイン州、キャンプ・オーアトカの場合- ●知的障害児のキャンプ「ニコニコキャンプ」実践報告 ●ガンバレ! 能登震災支援キャンプ報告 ●冬の陣と雪の吟-「雪のスゴイ!」を体験しよう。冬の檜原湖キャンプ 2008 ●ぱるぱるキッズ 2007 実践報告 ●日本の野外活動に対する中国の (小学-大学) 男女学生の認知度 ●「社会力」を育成する教育プログラムの開発-プロジェクトアドベンチャーの手法を応用して- ●連想法を用いたキャンプの効果測定を試み ●新入生オリエンテーションキャンプが大学生の仮想的有能感に及ぼす効果 ●ファミリーを対象としたイベント型事業「あいちキャンプフェスティバル」の実践報告-他団体との連携と運営のポイントに着目して- ●『若者自立支援事業「本当にやりたい!」ことプロジェクト」実践報告』 ●サントリー・神戸 YMCA 共同プロジェクト-余島プロジェクト- ●「読書」による観想的キャンプ生活-中村春二口訳「方丈記」の野外教育的価値に着目して-

[ポスター発表] ●利用者アンケートにみる静岡県立朝霧野外活動センターの利用状況 ●地域住民への自然体験活動の提供に向けた大学におけるシステムづくり ●自由回答からみる保護者のキャンプ参加費に対する意識 ●日本のキャンプスタンダードの開発に向けて-キャンプが青少年の成長に及ぼす効果- ●日本のキャンプスタンダードの開発に向けて-プログラムと自然・生活環境に着目して- ●日本のキャンプスタンダードの開発に向けて-参加者と指導者に着目して-

■第 12 巻第 2 号 (2008/9/30)

[実践報告] ●幼児キャンプの実践 ●キャンプを通じた地域づくりの試み「あしがらシニアキャンプ」

■第 12 巻第 3 号 (2009/1/31)

[実践報告] ●子どものキャンプ参加費用に対する保護者の意識-不満足評価の視点に着目して-

[報告] ●キャンプディレクター 2 級指導者の実態・意識調査に関する報告 ●第 12 回日本キャンプ会議全体報告~みんなでつくるあしたのキャンプ (指導者編) ~

■第 13 巻第 1 号 (2009/5/23) Camp Meeting in Japan 2009 -第 13 回日本キャンプ会議特集号

[口頭発表] ●組織キャンプにおける儀式プログラムの意義と役割-米国キャンプ・オーアトカにおける騎士道プログラム- ●病氣とたたかう子どもたちに夢のキャンプを~医療設備を備えた日本初のキャンプ場開設に向けた、そらぶちキッズキャンプの取り組み~ ●休止スキー場を活用したキャンプの試み-白山市アドベンチャーキャンプの実践から- ●

指定管理者団体における野外活動事業の申込状況の推移 ●組織キャンプが参加者の環境リテラシーに及ぼす効果と要因の関連 ●ロールレタリングを用いたスタッフトレーニングプログラムの開発 ●中国における野外専門運動基地の現状～天津市山野運動基地～ ●実地踏査等を重視し当事者意識を重視した養成プログラムで指導者になることの意義 ●教員・保育者をめざす女子大学生を対象としたチャレンジキャンプの実践報告 ●活動の質を高めるチャレンジとリラクセスの落差の追求ー日常生活に「持ち帰り・般化・敷衍・思い出し」可能なキャンプでの身体感覚・技法ー ●冒険キャンプにおけるキャンプ場面でのふりかえり体験の調査 ●長期キャンプ参加者と指導者の内面的成長について考える (1) ●体験がもたらす教育的効果 ●幼児とその保護者における自然体験の現状～子どもの育つ環境による自然体験の違い～ [ポスター発表] ●週末を活用した親子キャンプの試み～スケートキャンプの実践報告～ ●「スノーシューを履いて雪の原野での自然観察会」実践報告 ●静岡県立朝霧野外活動センター利用団体の教育的効果に関する調査ー1年目結果報告ー ●Means-End Analysisを用いたキャンプ効果の要因の検討 ●子育て支援としての「ママチルキャンプ」8年間の経緯と継続上の課題 ●小学校長期自然体験活動の効果とその要因～鹿沼市自然体験交流センターを事例として～ ●幼児キャンプにおけるイラストを用いた健康管理の試み

#### ■第13巻第2号 (2009/11/30)

[実践報告] ●「20/20 Vision」と「多様性への挑戦」～2009年全米キャンプ会議に参加して～

[研究資料] ●教職を意識したキャンプ実習の一考察

[報告] ●第13回日本キャンプ会議全体報告～みんなでつくるあしたのキャンプ(安全管理編)～

#### ■第14巻第1号 (2010/5/22) Camp Meeting in Japan 2010ー第14回日本キャンプ会議特集号

[口頭発表] ●保育者養成を目的とした組織キャンプの実践とその試み ●ホリスティックな教育キャンプ実践報告 ●G.N.C.A. スプリングキャンプ『ドリームキャンプ』報告 ●JALTプログラム内容が参加者の自己概念変容に及ぼす影響 ●キャンパーの志向によるキャンプの効果の表れ方の違いーつながり志向性・自然体験効果・感性の関係からの考察ー ●発達段階に応じたキャンプ効果の比較～メタ分析を用いて～ ●キャンプにおける場の力～ウィルダネス体験に着目して～ ●日米交流サマーキャンプ20年の歩みーその1 ●WEA 2010 National Conference on Outdoor Leadership 参加報告 ●地域住民との協働によるフィールドづくりの試みーツリーハウスづくりの取り組みからーなぜバックカントリースキーを求めるとか～バックカントリースキーへの移行に注目して～ ●地域活性化に貢献するキャンププログラムに関する研究～コンジョイント分析の適用～ ●知的障害高等養護学校における自然体験活動の実態について [ポスター発表] ●「生きる力」を育む効果的な野外教育プログラムの検討～「アイガモを食べる」体験プログラムの効果測定～ ●日米交流サマーキャンプ20年の歩みーその2 ●玉川大学教育学部野外教育演習開講の背景と学生の取り組み ●静岡県立朝霧野外活動センター利用団体の教育的効果～2ヶ年調査結果の分析～ ●ウェビング・テープを使ったチームビルディング「ラクーン・サークル」実践報告および体験 ●ラボキャンプ2009効果測定調査報告 ●体験型親プログラムを取り入れた発達障害児キャンプの効果 ●アメリカ・キャンプ協会100年の歴史

#### ■第14巻第2号 (2011/1/30)

[実践報告] ●「ドリームキャンプ」実践報告 ●水辺活動における指導者の「ヒヤリ・ハッと」調査～その後に生かせる対応策とは～ ●公園での野外教育実践～プレーパーク活動を通して～ ●大学と地域の連携による年間を通じた野外教育プログラムの展開

[研究資料] ●自然体験活動における子どもたちが求める理想の指導者 ●キャンプ場の施設評価に関する研究～山梨県の市営キャンプ場を例として～

[原著論文] ●野外活動施設利用者の満足度と再利用意図に関する研究 ●専門学校生対象のチームビルディングを目的としたキャンプ実習の効果 ●キャンププログラムにおける火の使用体験と火への認識・自己成長性との関連に関する研究

#### ■第15巻 (2012/1/31)

[特集] ●子ども達の悲しみを支えるということーグリーンキャンプの試みにむけてー ●東日本大震災の被災者を対象とするグリーンキャンプの取り組み

[実践報告] ●キャンプ指導者資格を取得した教員・保育者への意識調査の試み ●大学生の宿泊研修(野外活動)の現状と課題 ●カンボジアにおける青少年教育とキャンプの現状 ●Hole in the Wall Camps～病児キャンプの世界的ネットワーク～

#### ■第16巻 (2013/3/10)

[研究論文] ●キャンプ参加児童に対する教育効果と保護者の認識・期待との関連性

[実践報告] ●被災地域の児童を対象としたキャンプ実践報告と今後の課題 ●自然体験型健康増進プログラム「スマイル・ウォーク」の実践とその成果 ●大学生の宿泊研修(野外活動)の現状と課題ー第2報ー

#### ■第17巻 (2014/3/10)

[研究論文] ●雪上キャンプにおけるイグルー内の環境に関する調査研究

[実践報告] ●南会津アドベンチャーキャンプの実践と地域連携の可能性 ●父子キャンプ(パパチルキャンプ)の実践 ●「災害に備える」野外力をきたえよう～アウトドア体験キャンプの実践報告と今後の課題

■第 18 卷 (2015/2/15)

[ 研究論文 ] ●大切な人を亡くした子どものグリーフキャンプの実態とその効果に関する文献レビュー ●キャンプ体験が被災地児童のメンタルヘルスと生きる力に及ぼす影響 ●ハンディ気象計による気象リスクマネジメントの可能性～トムラウシ山遭難事故 (2009) 報告書より～ ●民間野外教育事業者におけるヒヤリハットの分析

[ 実践報告 ] ●Frost Valley YMCA の価値教育 ●自然体験がキャンプ指導者の野外指導スキルに及ぼす効果

[ 事業報告 ] ●グリーフキャンプ・フォーラム抄録「子どものグリーフサポート～地域社会の役割・キャンプの役割～」

●Camp Meeting in Japan 2014 ～第 18 回日本キャンプ会議～全体報告 海外のキャンプ事情～日本の状況との比較から～

■第 19 卷 (2016/2/15)

[ 研究論文 ] ●不登校中学生を対象とした継続型キャンプの効果に関する検討ー社会教育施設と適応指導教室の連携事例ー

●テーマパークでの修行体験を利用した体験教育の試み～Kidzania 就業体験と野外教育の場合～ ●キャンプにおける安全教育が参加者の危険認知能力の向上に及ぼす効果に関する研究

[ 実践報告 ] ●民間野外教育事業者におけるスキーヒヤリハットの分析 ●高校体育科キャンプ実習報告ースポーツ選手の基礎力を育むことを目指してー ●長期キャンプの意義を改めて考えるー「チャレンジキャンプ 2015～リヤカーで小豆島一周 110km の旅～」の事例からー ●くしろアウトドアキッズスクール 2015 冒険の旅の実践 ●キャンパス近くの自然を活かした活動及び重層的な指導システム

■第 20 卷 (2017/2/15)

[ 実践報告 ] ●野外救急法を取り巻く最新の動向 ●ろう児のキャンプにおける親プログラム実践の成果と考察

[ 講演録 ] ●第 6 回アジア・オセアニア・キャンプ大会基調講演ー Organized Camping in Japan ー

[ 特別寄稿 ] ●組織キャンプの先駆者小西孝彦が残したもの

◆CAMP MEETING IN JAPAN (日本キャンプ会議) 発表題目一覧

■第 1 回日本キャンプ会議 (1997/5/24、国立オリンピック記念青少年総合センター)

[ 研究の部 ] ●グループ活動における心の安全について ●キャンプ指導者の状況認知に関する研究 ●日本における療育キャンプの歴史 ●キャンプ療法の確立にむけて ●雪中キャンプが及ぼす意識変化について ●ペグの打ち込み角と強度との関係について ●女子大生のキャンプ実習における血清脂質代謝変動について ●青少年の組織キャンプの運営におけるキャンプカウンセラーの貢献度 ●国立公園の意義とレンジャーの必要性 ●組織キャンプにおける選択プログラムの在り方について

[ 報告の部 ] ●自然環境下の保養体験による心理的・生理的変化 ●冬のサバイバルキャンプを通して ●「であい・ふれあい・かよいあい」の福祉の町で野外活動における障害者とともに歩む ●ぜん息児のサマーキャンプにおける運動適正テスト ●痴呆性老人と行うシニアキャンプ ●自閉症の人たちがキャンプを楽しむために ●「0-157」が青少年施設に与えた影響 ●盛岡大学におけるネイチャーゲーム実践報告 ●(神戸ー東京) 中学生・高校生ふれあいキャンプ ●静岡県キャンプカウンセラー協会の活動について

■第 2 回日本キャンプ会議 (1998/5/23、国立オリンピック記念青少年総合センター)

[ 基調講演 ] ●全日本学生キャンプの草創

[ 研究の部 ] ●野外炊さんの薪 (マキ) の代替燃料に関する研究 ●青年期の学校キャンププログラムに関する一考察 ●参加児童・生徒による冬季キャンプの評価 ●障害児における雪上での感覚統合トレーニングキャンプ ●喘息児キャンプにおける腹式呼吸を応用した室内ゲームの実践 ●グループを理解する～喘息児キャンプにおける A 子を通じて ●キャンプの評価～キャンパーが意識するキャンプの効果を中心として ●高齢者キャンプの効果について考える～血圧および血液循環動態に及ぼす影響 ●組織キャンプにおける選択プログラムのあり方について (2)

[ 報告の部 ] ●ACA アメリカキャンプ協会総会報告 ●OBS 冒険を通しての体験学習 ●こども糖尿病キャンプの現状と課題 ●フロンティアアドベンチャー事業のその後 (1) ●フロンティアアドベンチャー事業のその後 (2) ●自然生活体験キャンプ実践報告 ●青少年のボランティア体験としての福祉キャンプ ●野外活動指導者その専門家としての条件～横浜市野外活動指導者養成講座ジェネラルディレクターの立場から

■第 3 回日本キャンプ会議 (1999/5/22、国立オリンピック記念青少年総合センター)

●台湾における童軍 (ボーイスカウト) 教育に関する研究 ●ACA 公認滞在型キャンプの分析 ●火打ち金による火付け法 ●キャンプにおける薪への着火についての実験的研究 ●自然教室における火起こしプログラムの理科実験的展開 ●星美ホームに於ける野外活動の可能性～日本横断徒歩旅行を通じて～ ●知的障害者社会就労センターのキャンプの実践 ●障害者キャンプの実際～木の葉の森の実践～ ●知的障害者におけるキャンプファイアーの検討 ●障害児における氷上での感覚統合トレーニングキャンプ ●進学塾における野外教育への取り組み ●市立キャンプ場・キャンプカウンセラー卒業生の活動について ●1 ヶ月の長期自然体験キャンプ「心のふるさと村」報告 ●生きる力を育む自然教育の森学園スノーキャンプ実践報告 ●キャンプと NPO ●日本キャンプ協会の誕生 ●高齢者キャンプの効果について



て考える(Ⅱ)～5泊6日のキャンプ生活における血圧、加速度脈波の変化～ ●思春期の女子キャンパーを理解する～  
性に対する関心を中心に～ ●野外活動の指導におけるアポトシス～活動の目的化をめざして～ ●キャンププログラム  
における軽登山中の水分摂取に関する研究～体育系学生のキャンプ実習～

■第4回日本キャンプ会議(2000/10/2～5、国立オリンピック記念青少年総合センター)

※第4回日本キャンプ会議は第5回国際キャンプ会議と合同で行われたため、発表抄録集は別冊となっています。

■第5回日本キャンプ会議(2001/5/19、国立オリンピック記念青少年総合センター)

●幼児対象野外教育の実践報告 ●自然からの自己発見～共に創りあげる～ ●キャンプカウンセリングの体系化の試み  
●長期キャンプにおける子どもの自主性の発達とその原因 ●知的障害児のソリ遊びキャンプ ●障害児キャンプの企画  
と運営—YMCA プロジェクト・SEED のケース— ●障害者キャンプを支えるボランティアのシステム～キャンピズの会  
員制度を中心に～ ●キャンプ・インストラクター課程認定校における認定プログラムの実践報告 ●登山用ストック使  
用の有無が登山者に与える影響 ●白馬シニアキャンプ協会設立レポート ●子どもの生活自立の「もと」を引き出す野  
外体験 ●サイエンスキャンプ ●キャンプと音楽 ●生ゴミサイロを利用した環境教育

■第6回日本キャンプ会議(2002/5/18、国立オリンピック記念青少年総合センター)

●自然との接点への実践例としての提案 ●新しいキャンプへの取り組み—ハイテクキャンプと竹をテーマとした参加体  
験キャンプ ●夏季ゼミキャンプにおける他者観察の変動 ●戦前の社会事業におけるキャンプ活動 ●キャンプです  
る大学入試 ●山梨大学における学生主体型キャンプの実践報告—アウトドアパスーツの授業において ●丹波自然塾のあ  
ゆみ ●乳幼児と母親のためのキャンププログラム ●キャンプで気づく便利さについて ●課程認定校におけるキャン  
プ・インストラクター資格継続への試み ●児童・生徒におけるバックパッキングプログラムの実践報告 ●知的障害児  
のための教育キャンプの実践 ●知的障害ボーイスカウト・ローバー隊の北海道遠征 ●キャンプと音楽療法

■第7回日本キャンプ会議(2003/5/17、国立オリンピック記念青少年総合センター)

●組織キャンプにおいてグループリーダーの書く記録 ●精神障害者側の立場から見たキャンプの必要性 ●不整地サイ  
トにおける車椅子体験キャンプの実践 ●キャンプにおける参加者の「ソーシャルスキル」の変化について ●English  
Immersion Camp における子どもたちの変化と成長 ●ハワイ・カウアイ島アドベンチャーキャンプ2003 ●長期キャン  
プ“わんぱく子ども宿(10泊11日)”の効果 ●兵庫県自然学校指導補助員に関する調査 ●キャンプ・インストラクター  
取得者の活動への取り組み ●親子参加型自然学校に関する調査 ●キャンプと音楽療法2 ●多摩川を題材とした環境  
教育的プログラムの提案 ●馬との関わりが対人関係に及ぼす効果 ●体験学習としてのキャンプ ●キャンプにおける  
女子高校生の自己概念の変容課程 ●登山下山の不安と疲労に関する研究 ●空気圧縮式発火具をつくる ●キャンプに  
「軍手」は万能でない ●焚き火のイメージに関する研究

■第8回日本キャンプ会議(2004/5/15、国立オリンピック記念青少年総合センター)

●自然体験活動指導者の動機に関する研究 ●幼少年期の自然や人の関わりと自然体験活動への興味の関連について ●  
キャンプ中の感情の変化について ●子どもを主体にした新しいキャンプ ●沖縄わんぴーすキャンプ ●学校へのキャン  
プの誘い ●「自然体験冬の陣」を通してのスタッフの学び ●大学生を集めるCAMP ●組織キャンプと社会福祉  
●キャンプインフォメーションセンター相談記録より ●Leave No Trace アメリカの野外教育指導者養成における実践  
●アメリカにおける野外教育指導者カリキュラム相談記録より ●幼児のための雪上野外活動 ●第27回ウィンタース  
クール実践報告

■Camp Meeting in Japan 2005 —第9回日本キャンプ会議(2005/5/15、国立オリンピック記念青少年総合センター)

●野外教育指導者養成キャンプの実践報告 ●大学カリキュラムにおける野外教育プログラム ●子どものための週末  
キャンプ ●授業として試みたアラスカ犬ぞり体験プログラム ●野外活動チャレンジ村アドベンチャーキャンプ実践報  
告●第12回わいわいチャレンジキャンプ実践報告 ●2004夏の体験学習 夏!君の勇気にか・ん・ぱ・い ●母親グルー  
プが運営する自閉症児の雪上キャンプ ●野外教育セミナー in ニューヨーク報告 ●ACA National Conference 参加報告  
●国際自然大学校日野春校の取り組み ●自然体験活動冬の陣イグルー完成(映像発表) ●雪上キャンプでの敷物の断熱  
効果実験 ●キャンパーが影響を受けた活動について ●野外トイレの研究 ●自然学校が与えた影響について ●山村  
留学における相談員の業務 ●キャンプにおける呼称についての研究 ●自然体験活動におけるボランティア指導者の意  
識に関する研究 ●災害と野外活動(私の体験) ●OBSプログラム継続参加者のセルフエフィカシーの変容 ●ふりか  
えりがキャンプの効果に及ぼす影響 ●異文化交流キャンプが参加者の国民性理解に及ぼす影響 ●アジアキャンプ連盟  
(ACF)の創立

■第15回Camp Meeting in Japan 2011(2011/9/22～25、静岡県立朝霧野外活動センター)

※第15回日本キャンプ会議は日本キャンプ協会設立45周年記念 第20回全国キャンプ大会 CAMP FESTA 富士・朝霧  
と合同で行われたため、発表抄録集は別冊となっています。

- Camp Meeting in Japan 2012 ー第 16 回日本キャンプ会議 (2012/5/26、国立オリンピック記念青少年総合センター)  
 [特別講演] ●「グリーン (ワーク) × キャンプ」にできること  
 [口頭発表] ●防災教育に必要とされるキャンプ技術～石巻での 21 日間の支援から～ ●「～のんびり遊ぼう～ニコニコキャンプ!!」リフレッシュキャンプの実践報告 ●「福島の子供たちとその家族に笑顔を」～アカデミーキャンプの実践報告～ ●YMCA フレンドシップキャンパー子どもらしく過ごせる時間を取り戻す ●県外避難者の子どものケアとキャンプ ●三鷹子どもの楽校 福島の子どもたちと森の楽校サマーキャンプ～「つくる」を遊ぶ夏季学校～ ●リフレッシュ・キャンプ参加者の実態調査～その 1 ●レスキューザックの開発と効果 ●Experiential Education Evaluation Form:3E フォームの開発 ●Experiential Education Evaluation Form:3E フォームのデモンストレーション ●キャンプ指導者養成におけるスキル習得に関する考察 ●沖縄の無人島キャンプにおける自己・他者肯定感の変容 ●年間利用者 8,000 人超の「立少トントンたんけん隊」の実態と今後の展望 ●地域と学校の有機的連携を促す自然体験活動に関する研究～広島県廿日市市の事例から～その 1 ●キャンプ体験が教職志望学生の自然体験活動の指導力に及ぼす影響～その 1 ●大学生の宿泊研修 (野外活動) の現状と課題 (第 2 報)  
 [ポスター発表] ●静岡県立朝霧野外活動センター利用団体の教育的効果 (3) ー 4 ケ年調査結果の分析ー ●東日本大震災被災地でのグリーンキャンプの実践報告「岩手しげんとあそびキャンプ in テンパーク」の取り組み ●地域と学校の有機的連携を促す自然体験活動に関する研究～広島県廿日市市の事例から～その 2 ●キャンプ体験が教職志望学生の自然体験活動の指導力に及ぼす影響～その 2 ●リフレッシュ・キャンプ参加者の実態調査～その 2
- Camp Meeting in Japan 2013 ー第 17 回日本キャンプ会議 (2013/5/25、国立オリンピック記念青少年総合センター)  
 [口頭発表] ●社員教育研修としての野外活動プログラムの可能性ー Outdoor Training Program を導入した TS Camp ー ●参加目的に着目した組織キャンプ参加者の特徴ー白山市アドベンチャーキャンプの実践からー ●多文化での野外教育プログラムから考えたこと ●冒険的自然体験キャンプ「私たちの 4 日間」 ●幼稚園・保育園との連携～あかぎの森のようちえん実践報告～ ●岡山県の中山間地域における自然体験活動の実践報告 ●グリーンケアキャンプに参加して～被災地の子どもたちとともに～ ●被災地域の児童を対象としたキャンプ実践報告と今後の課題 ●静岡県における不登校キャンプの取り組みについて ●国立青少年教育施設の取り組みー新しい公共型運営についてー国立赤城青少年交流の家から～ ●自然体験活動におけるマダニ対策について考える～広島県での取り組み (報告) ～  
 [ワークショップ発表] ●ウィルダネス教育協会指導者資格認定コースの報告と今後の展望 ●キャンプで使える「手話」表現
- Camp Meeting in Japan 2014 ー第 18 回日本キャンプ会議 (2014/5/24、国立オリンピック記念青少年総合センター)  
 [口頭発表] ●LEAVE NO TRACE の日本での必要性和普及について ●環境ボランティアリーダー海外研修 (ドイツ) 報告 ●組織キャンプにおける Leave No Trace プログラムが参加者の環境に対する態度に及ぼす効果 ●東京 YWCA 森林ワークキャンプ～プロに学ぶ森づくり体験～ ●ウィルダネス教育におけるウィルダネスの場についての検討～わが国での実践にあたって～ ●国際ワークキャンプ参加報告と参加動機に関する調査 ●キャンプカウンセラーのユーモア表出が参加者の集団雰囲気にも～ストレス耐性を高める効果～ ●ICU ジュニアキャンパス・キャンプ～大学施設を使った大学らしい子どもキャンプの実践～ ●関東甲信越地区青少年施設協議会青年部会の取り組み～アメージングガイドができるまで～ ●災害時対策教育プログラムの実践について  
 [ポスター発表] ●キャンプの国際比較 その 1 「日本型キャンプ」をさぐる 1-2 日本のキャンプスタイル ●岡山県 A 大学におけるキャンプインストラクター養成実習の現状と改善策 ●地域のチカラを活かしたコラボレーション～通年型農業キャンプ 風っ子ファームの取り組み～ ●南会津アドベンチャーキャンプの事業評価と地域連携 ●青少年の体験活動等に関する実態調査 (平成 24 年度調査) の報告  
 [あれこれ発表] ●『ハンディ気象観測ツール』によるアウトドアリスクマネジメント ●アメリカ組織キャンプからの学び ●続・キャンプで使える「手話」表現～目で見てわかるコミュニケーション～ ●One Minute Camp Evaluation Experiential Education Evaluation Form 改訂版の体験  
 [全体会] ●海外のキャンプ事情～日本の状況との比較から～
- Camp Meeting in Japan 2015 ー第 19 回日本キャンプ会議 (2015/5/30、国立オリンピック記念青少年総合センター)  
 [口頭発表] ●わが国におけるアウトワード・バウンドを基礎とした冒険教育の動向についての一考察 ～文献による調査を通して～ ●Day Camp の可能性～1 日の中で子どもたちに主体をあずける～ ●米国キャンプ・オーアトカ (Camp O-AT-KA) における日課プログラムの意義ー余暇教育としてのキャンプ・プログラムー ●北海道教育大学岩見沢校における指導者養成 ●キャンプが児童のアサーション行動に及ぼす影響 ●登山におけるストレスコーピングに関する研究 ●スポーツチームに対する ASE プログラム導入が集団凝集性に及ぼす影響- チーム所属年数に着目して- ●WE A 野外指導者養成コースにおける野外指導スキルの発達 ●災害ボランティアとキャンプ ●民間野外教育事業者におけるヒヤリハットの分析 ●スキーキャンプのヒヤリハット ●キャンプにおける安全教育が参加者の危険認知能力の向上に及ぼす

影響 ●大学の授業としての、場に注目したカナダ厳寒期の多国籍遠征 ●あかぎワールドコミュニティ～余暇教育としてのキャンププログラム～ ●自然体験で地域づくり まえばし・マイはし・プロジェクト ●「海ガキ・山ガキになろう！ 2014 夏」実践報告

[ポスター発表] ●公園における親子を対象とした自然体験活動プログラムの可能性 ●キャンプ体験が参加児童の道徳性に及ぼす影響 ●静岡県立朝霧野外活動センターの利用状況の推移とアンケートから施設の可能性と課題を探る ●Café de CAMP の作り方ー参加者をつくる空間ー

[あれこれ発表] ●続々・キャンプで使える「手話」表現～目で見えてわかるコミュニケーション～ ●工作体験（お箸づくり）を通じての安全で正しいナイフの使い方ービクトリノックス工作イベントサポートプログラムー ●ハンディ気象観測ツールによるアウトドアリスクマネジメント（実践編）

[全体会] 子どもシンポジウム ●ろう（聾）の子どものためのキャンプ～デフキッズキャンプ～ ●被災地域の子どものためのキャンプー南会津アドベンチャーキャンプー

■ Camp Meeting in Japan 2016 ー第 20 回日本キャンプミーティング（2016/6/4、国立オリンピック記念青少年総合センター）

[ポスター発表] (研究発表) ●国立青少年教育施設における冒険教育プログラムの取組ージュニアチャレンジ淡路島一周ー ●キャンプ体験が小中学生のアサーティブに及ぼす影響 ●大学キャンプ実習におけるストレスとストレスコーピングに関する研究 ●体育授業における ASE の効果について ●森のようちえん活動が幼児の運動能力に及ぼす影響（実践発表） ●わが国におけるリーブ・ノー・トレイスのこれまでの取り組みと今後の展望について ●知的障がい者に対する日常生活に変化を作り出す地域生活支援ーユニバーサルキャンプを通してー ●チャレンジキャンプ 2015 ～リヤカーで小豆島一周 110 km の旅～ ●千葉市少年自然の家主催事業「セブendays キャンプ」の実践報告 ●オフザピッチトレーニングとしての雪上野外研修プログラムの実践 ●保育内容研究と自然・生活・あそび ●大学授業での長期バックカントリーキャンプ ●ろう・難聴の子どもキャンプに参加した聞こえるスタッフのふりかえり～デフキッズキャンプの実践から～ ●町田ゼルビアにおける自然体験活動の実践報告 ●2015 年多摩の自然学校 ●無人島キャンプの実践 ●米国大陸横断体験記

[ワークショップ発表] ●キャンプで美味しい！コーヒーの入れ方教室 ●フィールドワーカーのための危険生物“ハチ” “ヘビ” 対策セミナー & 交流会 ●私たちはリスクに対する説明責任をどう果たすのか How do we achieve accountability for risk? ●環境教育プログラム「プロジェクト・ワイルド」を体験してみよう

■ Camp Meeting in Japan 2017 ー第 21 回日本キャンプミーティング（2017/6/10、国立オリンピック記念青少年総合センター）

[ポスター発表] (研究発表) ●キャンプにおけるボランティアマネジメントの日本と海外の比較調査 ●キャンプにおけるふきだし法の有効性について ●大正時代から昭和時代戦前期における社会事業の組織キャンプ ●スペシャルニーズキャンプへのボランティア参加による知的障がい者に対する態度変容 ●スペシャルニーズキャンプの学生ボランティアにおける自己効力感の変化 ●わが国の冒険教育の動向から探る現代的課題について（実践発表） ●キャンプにおけるバーベキュー食材の新たな有効性 ●森の幼稚園など自然保育にキャンプの知識と技術をどのように活用するか ●少年サッカーチームを対象とした継続型キャンプの実践事例 ●第 6 回アジア・オセアニア・キャンプ大会 (AOCC2016) 報告 ●大学間交流スキーキャンプの取り組み（団体紹介） ●スペシャルニーズ・キャンプ・ネットワーク ●「出会いと体験の森へ」実行委員会 ●北海道キャンプ協会若手指導者団体「えぞっぷ」

[ワークショップ発表] ●組織キャンプにおけるチャイルド・プロテクションについて ●YMCA 三浦ふれあいの村防災ウォークラリーの取り組み ●ハチ・ヘビ・マダニ・ヤマビル・毛虫 etc…危険生物を楽しく学ぶ 野外教育者のための危険生物クイズ大会！ ●キャンプでのクラフト ●「違いを祝福し、違いを喜ぶ。」キャンプロイヤル体験報告 ●「アイズブレイク十人十色 ～みんなの十八番、大交換会！～」

※ Camp Meeting in Japan 2006 ー第 10 回日本キャンプ会議から Camp Meeting in Japan 2010 ー第 14 回日本キャンプ会議までの発表抄録集は『キャンプ研究』（毎巻第 1 号）として編集されています。

※『キャンプ研究』および『日本キャンプ会議抄録集』は有料で頒布いたします。ご希望の方は、日本キャンプ協会事務局までご連絡ください。

- ・『キャンプ研究』 各（本体価格 1,000 円＋税）送料別
- ・『日本キャンプ会議抄録集』 各（本体価格 1,000 円＋税）送料別

なお、以下は完売しました。

- ・『キャンプ研究』第 2 巻、第 4 巻第 1 号、第 12 巻第 3 号
- ・『日本キャンプ会議抄録集』第 1 回～第 5 回



## 編集後記

51年目を迎えた2017年は、今までの歩みを大切にしながらも、新たな50年に向けてのはじめの一歩を踏み出す年でした。その中で発行となった、今回の『キャンプ研究』には、2点の研究論文と講演録、特別寄稿の合計4点の掲載となりました。

「キャンプ実習における大学生の資質能力の変容」は、ふきだし法を用いてキャンプ実習が大学生に及ぼす影響について研究しています。ある特定の資質について掘り下げるのではなく、どのような資質にキャンプ実習が影響をあたえるのかという観点で、調査、分析を行っており、今後の更なる研究の広がり注目したいところです。

「大学運動部に対するASEプログラムが集団凝集性に及ぼす影響」では、先行研究を踏まえながら、ASEプログラムの効果やその要因について新たな視点で掘り下げています。ASEプログラムは、キャンプでも広く親しまれているプログラムですので、今後の活動の際の新たなヒントになるものではないでしょうか。

「自然と手を入れた自然(園芸)の中で」は、第21回日本キャンプミーティングの講演会の記録です。テレビでもおなじみの藤田智さんの口を通して語られる野菜作りの魅力と、キャンプにも通じる人を育てることについてのお話はとても興味深く、今後の私たちの活動の糧になるものでした。

「我が国における野外救急法の現状と課題」は、2017年6月に開催された第1回のWilderness Risk Management Conference (WRMC)でのシンポジウムをまとめたものです。野外の救急や、それを取り巻く環境について、簡単な歴史や概要とともに、より実践的な現場で活躍している方のお話を知ることができます。特に後半部分は、野外での活動に関わる私たちは、安全な活動のためにも、指導者としての自分自身を守るためにも、知識としてきちんと知っておかなければならないことが多くまとめられている貴重な資料です。

いずれの原稿もキャンプの価値や魅力を広く世間に伝えるために重要なものでした。「キャンプ研究」では、引き続き多様なキャンプの研究報告、実践報告を掲載し、広く社会へキャンプをアピールしていきたいと思えます。次号もみなさまからの投稿をお待ちしています。

## キャンプ研究

第21巻

2018年2月15日発行

編集発行者 公益社団法人日本キャンプ協会 キャンプ研究編集事務局

発行所 公益社団法人日本キャンプ協会

NATIONAL CAMPING ASSOCIATION OF JAPAN



**NCAJ**

National Camping Association of Japan

〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町3-1

国立オリンピック記念青少年総合センター内

TEL 03-3469-0217

FAX 03-3469-0504

E-mail [ncaj@camping.or.jp](mailto:ncaj@camping.or.jp)

©公益社団法人日本キャンプ協会 写真、論文、資料のコピー、複製・転載を希望される場合は、ご連絡ください。

# キャンプ研究

第21巻  
2018年2月発行

ISBN978-4-904008-12-6  
C9075 ¥1000E



9784904008126



1929075010006

## ▲研究論文

キャンプ実習における大学生の資質能力の変容

—ふきだし法による自由記述の分析を通して—

藤川 和俊・泉 敏郎

大学運動部に対するASEプログラムが集団凝集性に及ぼす影響

—新入生と在学生の比較から—

徳田 真彦・伊原久美子・加藤 佑一・高橋 宏斗・久田 竜平・田淵 洋勝・  
飯田 輝

## ▲講演録

第21回日本キャンプミーティング講演会

自然と手を入れた自然（園芸）の中で

～人を育てる野菜作り～

藤田 智

## ▲特別寄稿

我が国における野外救急法の現状と課題

寺田 達也・柏 澄子・佐藤 初雄・溝手 康文・稲垣 泰斗・岡村 泰斗・  
河波 弘晃・稲垣 尊仁・島崎 晋亮・小清水哲郎・山本 康之

## ▲資料

「キャンプ研究」投稿規程

「キャンプ研究」収録題目一覧

CAMP MEETING IN JAPAN 発表題目一覧



NCAJ

National Camping Association of Japan

公益社団法人日本キャンプ協会

定価（本体価格1,000円＋税）